

マルシェノルド

開発こうほう増刊／地域経済レポート
KAIHATSUKOHO Extra Number Regional Economic Report

2001
March
No.005

テーマ／地域とアート



地域とアート

日本の戦後の国づくり、地域づくりは、やはり経済優先、産業振興中心であったといえるでしょう。しかしながら、高度経済成長を経て、世界の先進国に所得で追い越し、モノの豊かさに満たされ、そしてバブルを経験した今、芸術や文化を通じた心の感動、尊さの大切さに、我々は改めて気が付き始めたのではないのでしょうか。

市場原理に振り回されることに疲れ、そこで芸術の価値に気付き、それをまちづくりや地域活性化につなげていこうという挑戦が地方で見られています。

地域とアートが結びつく動きや、アートがまちづくりにかかわっている取り組みを取材し、地域におけるアートの役割と可能性、そして課題を考えてみます。

Contents 目次

Forum : フォーラム01

パブリックアートを考える ーまち・ひと・こころ、豊かさを求めて
第6回 全国パブリックアート・フォーラム札幌から

・21世紀のキーワードは「アート」 法政大学名誉教授／田村 明氏

・基調講演「まちと彫刻～イタリアからの報告」 彫刻家／安田 侃氏

氏

・分科会報告

Contribution : 寄稿11

アートな景観の魅力 ー景観・デザイン・まちづくりとアート

有限会社中井仁実建築研究所 取締役環境デザイン室長 中井 和子

Case Study : 地域事例 ①17

まちの記憶を刻む ーアルテピアッツァ美唄ー

Case Study : 地域事例 ②20

芸術都市の新しい挑戦 ー札幌・モエレ沼公園ー

Report : レポート ①24

アートと地域づくり ～大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ2000～

・インタビュー 北川 フラム氏

Report : レポート ②30



第6回 全国パブリックアート・フォーラム札幌から

パブリックアートを考える

ーまち・ひと・こころ、豊かさを求めてー

パブリックアートとは、公共空間に設置された芸術作品という意味ですが、最近では、まちづくりのなかでアートの果たす役割に注目が集まり、この言葉も、単に公共空間にあるアート作品のことだけではなく、地域社会の創造や、地域の暮らしとのかかわり、さらにはまちそのものをアートに、といったように、パブリックアートが幅広く議論されるようになってきたように思います。

ここでは、パブリックアートにできることを考えようと、昨年10月14日に札幌で開催された「第6回全国パブリックアート・フォーラム札幌」のなかから、アートとまちづくりにかかわるお話をご紹介いたします。

パブリックアートとは何か、そしてまちづくりのなかで、アートが担えることはどんなことかを考えるきっかけになればと考えています。

まちの主人公は人間そのもの

私は芸術家ではなく、まちづくり屋ですが、もう30年も前に横浜市で「人間的なまち、個性的なまち、美しいまちを作りたい」と言い実践してきました。その当時は今は時代が違い、中央官庁や民間企業の人から「人間的なまちよりも経済が優先だ」「まちを美しくするなんてけしからん」とまで言われてしまいました。自治体のなかの人々も同様です。それでも、そういう人たちとずいぶん議論をして、まちの真ん中を通る予定だった高速道路を地下にすることを実現しました。高速道路も必要なのですが、それだけが一番大切ではない。都市空間は人間的な空間であるべきで、人間がまちの主人公であることを示したいと思いました。そこで高速道路が通らなくなって公園になったところを、より人間のものとはっきりさせるために考えたのがアートでした。優れたアート作品は、

21世紀のキーワードは「アート」

パブリックアート・フォーラムの提唱者である田村明氏のメッセージです。



法政大学名誉教授

田村 明氏
● Tamura Akira

くどくど説明する必要はありません。それを見ると、なんとなく人間的な空間に感じられるでしょうし、またアートにふさわしい都市空間をつくる努力が必要だと感じさせるでしょう。その思いが、いつかは素晴らしいまち、自分たちのまちだと誇りになっていくと考えました。当時はアート作品を購入すること、ましてや野外に置くなどということは、とんでもないという時代でした。それでもうまく寄付を求めることができ、委員会を設置するなど、いろいろと

工夫をして、アート作品を置くことを実現することができました。それ以降、各地で急激に公共空間にアート作品を設置することが、流行り出したと言えると思います。

パブリックアートは市民のもの

当時は予算もつかない時代でしたが、その後はバブル経済の影響もあ

り、急激にお金がつくようになりしました。また民間企業も、アートに関心を持つようになりました。これは大変結構なことですが、今度はあちこちに熟慮なくアート作品が置かれすぎて、それがきちんと住民に楽しまれているか、あるいは本当に美しいまちになっているかどうか、疑問に思えるところも出てきました。作品を置いたために、周囲が自転車置き場になっていたり、ごみ集積場になってしまうという光景も見られるようになったのです。こんなことではいけません。パブリックアートの価値を多くの皆さんが認めてくださったことはいいことですが、これからは、それがまちを本当に美しくしていくことができるかが問われていると思います。どんなアートを、どういう形で置けばいいのか。さらにアートをどのように管理していけばいいのか。アートを置いたまち並みをどう整えるのが課題です。パブリックアートとカタカナを使うのは、従来日本では「公共」とは役所が造り管理するという意味が強かったのです。市民社会のパブリックとは市民が協力して美しくしていくもので、役所のものではありません。パブリックアートは、市民皆さんのものです。市民の方もそれを認識して、アートを大切にしていくことが重要です。その仕組みと心構えがないと、いくらお金をかけて立派なアート作品を設置しても、まったく意味がありません。では、そのためにどうしたらいいのでしょうか。それをみんなで考える時期にきているのだと思います。芸術家も、評論家も、行政も、企業も、制作者も、メンテナンスをする人も、そして市民も、みんな一緒になって考える必要があるのです。現在は、ひところのように、どんどん予算がつく時代ではありませんが、

私が言い出した時代に比べれば、アートの必要性を多くの方が認めています。当時に比べれば、ずっと状況はいいのです。しかし、それだけに、流行に乗るのではなく、よく考えることが必要な時代になってきました。

これからは、みんなでどうやってアートをまちのなかに融合させて市民のものにしていくかを本当に考えていかなければならないと思います。アートとは、芸術家だけのものではありません。これからは市民のアートにしていくことが必要なのです。昔は例えば「彫刻を置く」という言葉を使っていました。しかし、今や「置く」のではなく、「まちをアートする」ことも必要ではないかと思えます。21世紀にはそういった展望が重要だと思えます。機能的で便利なまちだけではなく、より人間的なまち、楽しいまち、そして美しいまちをつくるために、アートは非常に重要な役割を担っていると思えます。

まちづくりは共同作品

まちはみんなでつくるものです。私は、まちづくりを市民の共同作品だと考えています。みんなで制作した、楽しい、美しい、個性的なまち、それがみんなで作った共同作品であり、その作品はそのまちにしかないものです。そうすれば、全国画一的なまちには絶対ならないはずです。そこにしかできないまちを、みんなの力で作っていくためにも、これからのアートの役割は非常に重要だと考えています。私は、21世紀のキーワードの一つにアートがあると思っています。すぐに効用が現れるものではありませんが、何かそこにあることによって意味を感じることができ、しかもそれはみんなが同じように感じるのではなく、押し付け

もない。人それぞれが感じ取ればいいのです。まちづくりは継続していかなければ意味がありません。今日、明日でだめになってしまうのでは困ります。長い目で見て考えていくことが大切です。そのなかで、すぐに効果が現れるわけではないのですが、広く市民に、じんわりと自分たちの地域という存在を感じさせるアートは有効ではないかと思えます。そうしたことから私は「まちづくり」の一つのポイントとしてパブリックアートを提唱しているのです。

北海道には、大変雄大な自然があります。それはアート以上のアートであり、個性です。パブリックアートには一般論があるわけではありません。それぞれの地域で、地域に根ざしたものがあっていいと思います。心豊かな生活をしたと思う人たちが集まってまちをつくり、それが共同作品になる。まち全体が共同作品になるために、アートは重要なキーワードになると思います。今までは効用・効率がキーワードでした。しかし、これからは効用だけの時代ではありません。北海道には北海道なりのパブリックアートがあっていいと思います。そしてパブリックアートを通じていいまちとは何か、いい住み方とは何か、豊かに人間的に生きるためにはどうしたらいいか、多くの素材を持っている北海道で、ぜひそういったことを考える機会を作っていってほしいと思います。

PROFILE プロフィール

法政大学名誉教授

田村 明 (たむら あきら)

法政大学名誉教授、都市プランナー。1926年東京生まれ。東京大学工学部建築学科、同法学部法律学科、同政治コース卒。運輸省、日本生命、環境開発センターを経て横浜市企画調整部長、同局長としての戦略的事業（地下鉄、ベイブリッジ、都心部強化、MM21、港北ニュータウンなど）の企画・推進、横浜スタジアムの設立、総合的土地利用、アーバンデザイン業務の創立にあたる。パブリックアート・フォーラムの提唱者でもある。

基調講演 「まちと彫刻～イタリアからの報告」

北海道・美唄市出身で国際的に活躍中の彫刻家・安田侃氏は、大好評だったフィレンツェの野外彫刻展を予定より早く撒収して帰国され、このフォーラムに協力くださいました。

2000年にイタリア・フィレンツェ市で開催された野外彫刻展「街と彫刻」をご紹介いただきながら、「まちと彫刻～イタリアからの報告」と題して、基調講演をしていただきました。



彫刻家

安田 侃氏

● Yasuda Kan

PROFILE プロフィール

45年生まれ。東京藝術大学大学院彫刻科修士課程修了後、70年イタリア政府招聘留学生として渡伊。ローマ・アカデミア美術学校でペリグリ・ファッツィーニ教授に師事。以降、大理石の産地で知られるトスカーナ州のピエトラサンタにアトリエを構え、創作活動を続ける。91年ミラノにおける個展「彫刻の道」、94～95年ヨークシャー彫刻公園（イギリス）における個展「大理石とブロンズ」、95年ピエトラサンタにおける個展「野外彫刻展」等の大規模野外彫刻展で知られ、10年ほど前からは「アルテピアッツァ美唄」において彫刻作品と自然が一体となった独自の環境づくりの試みを続けている。2000年には新千年紀に向けた特別企画としてフィレンツェ市内の主な広場や公園を舞台にした画期的な野外彫刻展「街と彫刻」が実現した。さらに、オーストラリア・シドニーにおける建築家レンツォ・ピアノ氏とのコラボレーションでも世界的に注目を集めている。

いう考え方で、それも街全体をイメージして構成できる作家に任せる展覧会にしたい、「この展覧会を成功させることによって、ルネッサンス以来500年、過去の世代が作り上げてきたものをただ守るだけになりつつあるフィレンツェの街に、21世紀につながる風穴を開けよう。伝統のなかに現代を、街に新たな出会いと美の息吹を入れる扉を開けよう。そのために<KAN>を呼ぶのだ」と大変な意気込みで困難な相手と交渉し、熾烈な戦いを続けた上で、現代彫刻家安田侃への依頼の打診があったわけです。

多くの人たちに支えられて

その交渉相手は、まずフィレンツェ市。そして日本でいえば「文化庁」にあたる「文化芸術監督省」のトスカーナ州のトップ、彼は前文部大臣でウフツィ美術館長も兼務しています。それから、これは日本にないシステムですが、トータルに見たトスカーナ州のイメージを守っていくために公園や庭園・建物に関する権限をもつ「環境と建築に関する監督官」。フィレンツェの長い歴史上、初めてこの3つが合同で行う企画で、みんながゴーサインを出してくれた

間に安田侃の現代彫刻を置くという今回の大胆な企画に対して、フィレンツェはルネッサンス以来500年近く芸術の宝庫としてのプライドを持って生きてきた、“所有しているアートの量と質は世界一”を自負するまちですから、「何を今さら、安田侃という東洋人の現代彫刻を街なかに置く必要があるのだ」という拒絶反応も当初にはかなりあったのです。

しかし、今回の展覧会を企画したオルガナイザーは、現代彫刻の展覧会との評価を得ている72年の第1回のヘンリー・ムーア以来のフォルテ・ディ・バルベデーレの彫刻展の企画者で、「その展覧会も実はマンネリになって来ていて、それに値する作家もいなくなってきた。21世紀を迎えるに当たって、マンネリを繰り返すよりも、新しい考えで彫刻展をやりたい」、「“彫刻”や“作家”に興味のある、限られた人だけがチケットを買って彫刻作品を見る-そういうどこの美術館でもやっている展覧会の発想から抜け出して、“街に出る”と

歴史と芸術の都 フィレンツェで初の試み

世界的な観光地、歴史と芸術の都フィレンツェで、市内の主要な広場や公園等8カ所を会場にした野外彫刻展が開かれました。シニョーリア広場、ウフツィ広場、ピッティ宮、ポーポリ公園、駅前広場等ルネッサンス以来のまちの歴史・芸術と深くかかわる由緒ある場所を全て一人の彫刻家に任せる展覧会は今までなかった訳で、それを任されるのは大変な名誉であるとともに責任を痛感し、引き受けた後には強い緊張と少なからぬ不安がありました。

21世紀に賭ける 企画者の意気込み

そのような侵すべからざる芸術空

ことによって実現した試みだったの
です。

さらに、この展覧会を支える多く
の人々がいました。30年前のムーア
の彫刻展以来の設置を手がけてきた
重機操作の名人、都市空間のなかに
彫刻を置く際の調和や設置の可能性、
基礎のあり方等をアドバイスする建
築家、道路管理者、美観や安全性に
関するマナーまでコントロールする
警察、ボーポリ公園の館長さんとい
った熱意のある人々と、各設置場所
ごとに1ヵ所ずつ時間をかけて議論
し、時には衝突もしながら設置の検
討を行い、アトリエのあるピエトラ
サンタとフィレンツェの間を往復し
ながら、観光客や市民の動きとぶつ
からない時間帯に一点ずつ設置して
いったわけです。どうしてもイメージ
に合う作品が間に合わなかったサン
タクローチェ広場は、妥協すること
なく遅れて設置されました。

波紋を呼んだ 記者会見でのやりとり

このような経緯の後、展覧会のオ
ープニングセレモニーの前日の記者
会見で次のようなやりとりがあった
のです。「この伝統あるルネッサンス
芸術の宝庫、フィレンツェで、なぜ、
東洋から来た彫刻家の現代彫刻をこ
んなに街じゅうに置かねばならない
のか？」という記者たちの大勢を占
める厳しい意見を代表したかのよう
な素朴な質問に、前文部大臣、現ト
スカナ州芸術文化監督官のパオロ
ッチ氏がこう答えたのです。「あなた
方はジャーナリストですから頭が良
いでしょう。ルネッサンスについて
も勉強して良く知っていますね。で
は、KANがシニョーリア広場に置い
た川の流りに作られたような『意心
帰』という石はわかりますか？」…

ジャーナリストは誰も答えません。
——「この石はわかるためのものじ
ゃない、勉強してもわからないので
すよ。これは感じるものなのです。
あなた方がよく知っているフィレン
ツェの美術は勉強すればわかるでし
ょうし、勉強してきた人には興味
があるでしょう。でも、何も勉強して
いない人やちょっとフィレンツェに
来た人、それに多くの子供たちにと
って、フィレンツェの美術は、あな
た方が思っているほどには興味はな
いのです。それに比べたら、この
KANの石、ここにある『意心帰』と
いう非常にシンプルな石は、多くの
人、特に感じることでできる人には
深く感じてもらえるものなのです。
これから迎える21世紀はそういう時
代なのです。そのために、私は敢え
て、KANのこの彫刻を、このシニョ
ーリア広場の真中に置くように頼ん
だのです」…ジャーナリストたちは
シーンと静まり返りました。震える
ほど嬉しい瞬間でした。このような
考えの人がトップとして責任を持
って許可を出し、しっかりしたコンセ
プトをもって挑んでくれ、それを受
けとめて多くの人たちが熱意を持
って取り組み、支えてくれたからこそ
今回の展覧会が実現できたのです。
さすがに、伝統ある、歴史あるフィ
レンツェだと実感しました。

文化芸術監督官が 寄せてくれた高い評価

そのアントニオ・パオロッチさん
が今回の展覧会のカタログに寄せて
くれた素敵な文章がありますので抜
粋してご紹介させていただきます。

「…安田の彫刻は、歴史的な街並
みと謙虚に小さな声で対話している。
それを理解するためには空っぽの頭
と透明な心、そして長い時間じっく

り見つめることが必要だ。芸術家は
フィレンツェの見事な基盤の上に彫
刻という駒を置くことで、静かな問
答ゲームを提起しているかのようだ。
美術史上、最も有名な彫刻ミケラン
ジェロ、チェルリーニ、ドナテッロ、
ジャン・ボローニャなどの作品の足
元に置かれた石：『意心帰』を見る
時、まるで何百年もの間磨かれてき
た川の小石のような完成度の高さと
完璧さに感嘆する。そしてこの彫刻
が白く輝く神なる大理石を賛えるべ
くそこに置かれ、フィレンツェの街
を見事に彩っているように感じるの
だ。本質的な表現と純粋な形のなか
に、ものに宿る魂を見出し、それに
意味を与える能力こそが安田のアミ
ニズムだ。子供たちは大きな石をな
で、恋人たちは大理石の額縁のなか
で写真を撮る。これは良いしるしだ。
なぜなら知と美のマエストロである
安田侃の詩的な芸術を人々が理解し
たという証拠だからだ…」

感じた人たちの温かい反応が 新聞の論調を覆した

しかし、このような高い評価にも
かかわらず、その翌日の新聞の論調
は「議会はミケランジェロを屋根裏
にしまい込んだ!」、「巨大なKANの
大理石の彫刻によって街が占拠され
た!」などという抵抗感を滲ませたも
のでしたが、市庁舎：パラッツォ・
ベッキオのなかの大広間で行われた
オープニングセレモニーはルネッサ
ンス音楽の演奏などもあって和やか
な雰囲気で行われ、何とか彫刻展を
スタートすることが出来ました。

「KANの作品の良いところは、見
る人、触る人のその時の精神状態が、
非常に素直に現れる…」 「この石：
『意心帰』は地球の中心のしるし…」
「(ミケランジェロの) ダビデと同じ



シニョーリア広場に設置された『意心帰』で遊ぶ子供たち Photo by Danilo Cedrone



サンタクローチェ広場に設置された『真無』 Photo by Taku Yasuda



ピッティ宮内中庭『天秘』 Photo by Danilo Cedrone

●これらのほか駅前広場に『掃門』、ウフツツ広場に『天聖』
「天浜」、ピッティ宮に『翔生』、ボーポリ公園に『無何有』『新生』
「天秘』『妙夢』、ストロツツイー広場に『天泉』が設置された。

石切り場から切り出した石を彫った
『意心帰』、すごい!」 「こんなものを
フィレンツェに置けたなんて大変な
ことをやったものだ。フィレンツェ
も捨てたもんじゃない。革命だ!革命
だ!… (隣に有名なサボナローラの
モニュマンがある)」 「彫刻が額縁に
なって、そのなかに入る人、彫刻に
入る人が主役になれる…」 『「天秘」
の上にゴローンとひっくり返って寝
ると空が抜けて見える…」 「みんな
その彫刻を誰が創ったかなど関係な
く、石に腰かけて休んだり、通り抜
けたり、写真を撮ったり、思い思い
に楽しんでいる…」 「敢えて作家性
を排除して、石の形態・存在そのも
のを提示する。多様な感じ方、楽し
み方が許容される限りない優しさ…」
「場の持つ特性、周辺環境と
一体となって彫刻が新たな空間の関
係性を生み出す…」 「この玉は何です
か? ミケランジェロの魂です。魂っ
て丸いんですか!?!…」 「歴史的な街
並みに置かれた彫刻は、見るためと
いうより、ともに生きるための新し
い場を創り出そうとしている…」

歴史的試みの証しが 永久に残ることに…

こうして、3カ月の会期中多くの
市民や訪れた観光客は、これらの彫
刻を自分なりに感じ、楽しみ、素直
に受け入れてくれました。その結果、
企画者たちは今回の「フィレンツェ
展」の作品のなかから『天秘』3点
の現代抽象彫刻を500年の歴史あるボ
ーポリ公園に永久設置するという大
きな決断を下してくれました。ボー
ポリ公園の館長は以下のように語っ
てくれました。

「このボーポリ公園の500年の歴史
始まって以来、現代彫刻を置くのは、
後にも先にもKANの作品だけ。歴史

ある公園にゆったりとした時を過ご
せる異次元の瞑想空間を創れること
を確信している…」

勇気と決断と責任

会期中だけの設置で、いずれ撤収
される野外展ではなく、後々動かし
難い永久設置の重み、釈明できない
責任、監督官が自分の首をかけてい
る。今回の展覧会で深く感銘を受け
たのが、作家だけでなく展覧会を企
画・オーガナイズする人たちの「勇
気」と「決断」と「責任」です。

展覧会の企画にゴーサインを出す
際には必ずサインをします。何事を
やるにもサインが必要ですから大変
なのですが、誰が責任を負うかがは
っきりしているという意味ではやり
やすいとも言えます。その点では、
日本におけるパブリックアートに関
して言いますと、システム的にトッ
プの人たちが出てこないですね。顔
が見えないのです。ヨーロッパの場
合は、パブリックアートが生活のな
かですごく大切な部分を占めるもの
として、まちが企画する展覧会とい
うものには、当然行政のトップが出
てきて、許可のサインをして、「何か
あったときには責任をとります」と
いう点が非常に明確です。そういう
ことがない限り、なかなか、新しい
ことは出来ません。

それから、先ほどお話しした「芸術
文化監督官」という制度も、トータ
ルな意味で美的なまちを創っていく
上で、日本においても絶対必要なシ
ステムだと思います。トップに立つ
人たちは、そういうまちづくりにお
けるアートなどのソフトの部分に対
して、きちんとサインして実施する
といった、「勇気」と「決断」と「責
任」を持ってまちづくりをしていた
だければと思います。

分科会 報告

パブリックアートをさまざまな角度から議論する分科会のなかから、まちづくりや地域づくりに寄せた、参加者からのメッセージをご紹介します。

第1分科会

「まちづくりを考える」から
地域の暮らしとアート
パブリックアートからコミュニティアートへ

第1分科会では、公共空間におけるアートの役割を、暮らしと密接に関連したまちづくりの視点から見直す議論が展開されました。

パブリックアートには 地域らしさを表現する役割が

●(株)CIS計画研究所代表取締役所長

濱田 暁生氏



江差町をはじめ、美幌市、下川町、真狩村など道内各市町村のまちづくり、景観計画、商店街活性化等を手がける。北海道地域づくりアドバイザー、同景観アドバイザーなども務める。

私は、まちづくりや地域での活動を支援し、コーディネートする立場で、いろいろな地域にかかわらせていただいています。江差のまちづくりとのかかわりのなかで、「江差追分」に関する施設を計画する際に地元の方が、最初に「江差らしい建物にしたい。追分の殿堂にふさわしい建物にしたい」とおっしゃったことを今でも覚えています。その時、地域がありたいと思う姿を求めて、地域の人たちと一緒に現場で作業していくのが本来のまちづくりのあり方なのではないかと思いました。現場に出かけて行って、地域の方々のお話を聞き、相談しながら進めていくことを通して、江差では地域の方が望んでいたものが形になっていきました。パブリックアートもある意味では地域の人々が望むものとして実現されていくべきでしょう。各地域にはいろいろな考え方の人が住んでいますが、量や大きさやお金の額などとは関係なく、それぞれの地域特有の価値があるはず。その価値観をしっかりと持った方が地域にいらっしゃることが、これからのまちづくりの大きな可能性につながります。

まちづくりにおけるアートの公共性の側面から考えると、例えば個人の住宅や庭であってもその前の通りを歩く人にとっては公共的な価値を持っているように、私的なものであ

っても公共性を持つという視点でアーティストが自分の表現を考えることが出来るかどうか。あるいはそういう視点で建築物や周辺環境とのかかわりを維持していく責任や、社会に対して新しい価値観に基づいた働きかけをしようという積極的な意欲を持つことが出来るかどうか、問われると思います。

また、パブリックアートには芸術としての普遍的な表現とともに、地域の人々の日々の暮らしのなかで、その地域や環境にふさわしい存在として、「地域らしさ」を表現していく大きな役割があると思います。

まちづくりとアートのかかわりのなかで、人々がその「地域らしさ」を他人から与えられたものとするのではなく、自ら感じ、楽しみ、それを享受し、自分にとっての価値を育み、愛着を持って維持していくことが必要ではないでしょうか。

しかし、その「地域らしさ」の物差しは一律のものである必要はありません。地域ごとの価値観で、もう一度自分たちの足元を見直していくことを通して、新しい可能性も生まれてきます。まちづくりを行政の担当者や専門家・コンサルタント任せにしないためには、真の意味での市民参加を実現する仕組みとして、行政による情報公開の徹底とともに、多様な人々が意見を発表できる場を用意することや少数意見を汲み上げる手法等が必要ではないかと思っています。



パブリックアートには 教育の要素もある

●株式会社輪島本店社長

中室 勝郎氏



漆の復権を目指し、日本初の漆芸デザイン会社や、漆のインテリア・サロンを開設。漆文化財として明治の町屋の復元などを行う。

私は十数年前から1カ月に1枚ずつ輪島の風景を絵の先生に描いていただいていたのですが、「来年の絵は?」と期待されるようになり、自分でまちを歩いて、美しい場所を発見する努力をしてきました。絵は120枚にもなりましたから、地域の美しいものを懸命に探してきたのだと思います。

そんな経験をしながら、ある時、一軒の町屋と出合いました。廃屋寸前の誰も住んでいない明治期の建物で、買う人を紹介してくれないかと言うのです。とにかくその廃屋に入ってみると、身の毛がよだつような思いをしました。もう輪島には残っていないと言われていた輪島の歴史がそこにはあったのです。

私の職業は漆器づくりですので、まちづくりとは無縁ですが、仕事柄、漆器のことや輪島塗について、特になぜ輪島に輪島塗があるかということや、その家に入ったときにその答えが見つかりました。輪島には輪島塗を作り出すに値する文化があったのです。今その文化は、どこにも見当たりませんが、その痕跡が廃屋のなかにありました。その後1年くらい悩んだ末、その建物を塗師の家として復元することにしました。その塗師屋の家は、

パブリックアートと同じような考え方が見られます。普通は前が仕事場で奥が住まいですが、そこは前が住まいで奥が仕事場なのです。住まいの部分は、毎日仕事に行く前に通るので、文化的な空間にしてあるので、パブリックアートにも同じような要素があると思います。それは、いかに人を育てるかということでもあり、皮膚で文化的感覚を身に付けていくことだと思います。そういう意味では、パブリックアートとは人をつくる教育であるように思います。

長期的な視点で、 根を育てることが重要

●穂別町政策調整課まちづくり推進参事

斉藤 征義氏



住民参加と生活文化のまちづくりとして「ほべつ銀河鉄道の里づくり」などの活動を実施。宮沢賢治学会員として詩集、研究論も多い。

穂別町の富内地区では、住民主導で、宮沢賢治の童話の世界をテーマにした銀河鉄道の里づくりという地域づくりを進めています。その経験では、地域の人たちがどこまでがんばれるか、どれだけ行政と喧嘩ができるかが重要なことだと感じました。同時に、全国の人たちとネットワークを形成していくことも大切です。そうすることで地域が活性化されるというよりも、自分たちが活性化されるのです。

最近では地域振興の手法も、どこでも同じようなイベントをするのではなく、人材育成や住民参加に注目が集まり、ずいぶん様相が変わってきました。しかし行政としては、マニュアルがないと取り組めないジレンマがあります。文化・芸術面では、

教育委員会中心の、動員数がバロメーターになるような側面も多かったように思います。そういう点は行政が意識改革をしなければならぬし、同時に地域住民も勉強して成熟度を高めていくように両輪で進めなければなりません。

穂別町では'91年に、中心街の通りにメタセコイアを植えました。これは非常に成長の早い樹木で、今は並木の根が歩道を押し上げてくるような状況です。沿道の商店街では根が店に入ってくるのではないかと、気が気ではありません。でも10年前にこれに取り組んだのは商店街の人たちです。これは時間的な考え方を持っていなかったということです。イメージ性だけにとらわれてまちづくりをした。ですから時間的な視点を持って取り組むことも非常に重要です。

今までの地域づくりは、メタセコイアの例でいえば、立派な木をつくるのが目標でした。しかし、これからは立派な木をつくることより、立派な根をつくるのが重要ではないでしょうか。何十年か先に、まちづくりとは何か、アートとは何かと議論をするような人たちをつくっていくことが今求められていると思います。

作品にするのではなく、 その先に目標がある

●コミュニティFM三角山放送局代表

木原 くみこ氏



札幌テレビ放送局でラジオ制作ディレクターとして活躍。'91年に同社を退社し、'97(株)らむれずを設立。'98年にコミュニティFM三角山放送局開局。

三角山放送局は札幌市西区の地域限定放送局です。私は以前、民間放

送局に勤めていましたが、放送という仕事に疲れて10年前に会社を辞め、すぐに反応がわかるような空間でコンサートをしたいと思い、しばらくコンサートを手がけていました。アルテピアッツァ美唄や穂別の廃校になった学校でもコンサートをしました。そこで気付いたのは、今までは外と遮断された立派なホールやスタジオで音を作ることがコンサートや放送だと思い込んでいたことでした。

アルテピアッツァでコンサートをすると、ピアノの音と一緒に風で葉がそよぐ音が聞こえて、とても心地がいいのです。ピアノの回りに寝転がって聞いている人もいれば、子供にお乳をあげながら聞いている人もいます。放送も同じように考えれば、ずいぶん違った存在に見えるようになったのです。昔のなかで放送するのではなくて、地域のなかで、日常生活のトーンで視聴者と話すことができるのではないかと考えたのです。そうしたら、一度捨てた放送をまたやりたいと思って放送局を設立しました。'92年から地域発信のコミュニティFMの放送ができるようになって、今では北海道で13、全国で137も三角山のような放送局があります。地域の情報を地域から発信していくことのニーズをひしひしと感じます。

以前、穂別の銀河鉄道の里であるイベントに参加したことがあるのですが、先生と一緒に子供たちが歌ったり、詩の朗読をして、自分たちが心から楽しんでいることを目の当たりにして、とてもいいなあと思いました。私が放送局を始めた動機は、場ができることで、地域に多くの友達ができるだろうと考えたことでした。簡単にいうと放送を「作品」にしたくなかった。放送をすることが終わりではなく、その先に目標があって、放送はあくまでも手段なので

す。アートにも同じことが言えるように思います。

第2分科会

「パブリックアートを考える」から 地域とアートの連携

第2分科会では、魅力ある地域社会の創造にとってアートがどのようにかかわっていくかを、さまざまな立場の方からご意見をいただきました。

パブリックアートを 観光資源に育てる発想を

●札幌テレビ放送株取締役会長

伊坂 重孝氏



'88年に札幌テレビ放送(株)代表取締役社長に就任。イサム・ノグチのドキュメンタリー、ドラマなどを制作。'99年より現職。(財)イサム・ノグチ日本財団評議員。

私は、約40年間北海道でテレビ放送に携わっておりますが、「地域とアートの連携」という意味では、当社が主催した美術展があると思います。放送局主催の展覧会では、おそらく当社が一番多いでしょう。過去21年間に17回開催していますが、'98年は札幌にモエレ沼公園がオープンした年でもあり、これに合わせて、イサム・ノグチ展を開催しました。若い

人に向けて、スポットCMをたくさん打ったおかげか、最終日には8万3千人という非常にたくさんの方々がいました。この展覧会と並行して、モエレ沼公園が着工10年目を迎えて、オープンしました。モエレ沼公園は、ディズニーランドを除く各地のテーマパークがほとんど失敗しているのに反して、真夏に大にぎわいとなり、土日には近くの自治体からバスを借り切って押しかけてくるほどの盛況ぶりでした。3~4万人の人々が駐車場があふれたこともあり、その後も市民の人気は高まっております。

大通公園にブラック・スライド・マントラが設置されたのが'92年ですが、当社でイサム・ノグチのドキュメンタリーを放映するためにニューヨークのイサム・ノグチ財団まで取材に出かけて行って、それ以来イサム・ノグチをずっと追いかけて、ドラマも制作しました。当社の南側にはブラック・スライド・マントラが、北側には植物園の緑があります。ちょうどその間に当社の多目的ホール・スピカも完成しました。そのなかにはイサム・ノグチの大きなプロンズの作品もあります。

札幌は、将来、目玉になるものを観光資源として利用していくことが必要ではないかと思っています。北海道がこれから生きる道は観光しかないと言われていますが、私たちは観光資源というものをもっと積極的に考えていかなければなりません。観光素材として、モエレ沼公園やブラック・スライド・マントラという滑り台を観光の目玉にしてしまうような発想があってもいいと思います。大通公園で黒く光る滑り台は、世界に誇れるものです。パブリックアートを観光資源にするような発想があってもいいのではないかと思います。

もっと公的な資金支援を

●ミュージアム・シティ・プロジェクト事務局長

宮本 初音氏



'90年よりミュージアム・シティ・天神(現ミュージアム・シティ・プロジェクト)の実行委員会にボランティアで参加。ミュージアム・シティ・プロジェクト事務局専従スタッフを経て'98年より現職。

私が事務局長を務めているミュージアム・シティ・プロジェクトは、'90年に福岡市、企業、アーティストの有志が組織した実行委員会で運営しており、2年に一度、街の中で現代美術の展覧会を実施することが主な事業です。この展覧会にかかわる収入は、現在、3千万円程度で、当初はすべて企業協賛で賄われていました。その後、自治体の補助金や助成金が増えていますが、それでも7割以上が企業協賛です。私は、このようなプロジェクトが企業協賛の資金を中心として賄われることは、健全ではないと考えています。福岡市や福岡県、文化庁などからも支援を受けている事業ですが、資金支援の面では公的な部分が非常に弱いといわざるを得ないと思います。

ところで、福岡でこうした取り組みが始まったのは、ちょうど市内に新しいビルが建ち始めたころで、福岡が味気ない街になってはいけなかったのでアートを取り入れていこうという大きな動きがありました。福岡には、アーティストの発表の場があまりなかったこともあります。そうしたいろいろな人たちの思惑が一つになってミュージアム・シティ・プロジェクトがスタートしました。第1回は商業地区の天神を中心に行いましたが、'98年からは、博多にも作品を置いています。博多では、地元住民と作家が実際に顔を合わせて会話を

しながら作品を作っていく過程もあり、今までとは雰囲気が変わってきました。

我々はこの取り組みを実験の場と考えています。美術館はフルコースのあるレストランですが、ミュージアム・シティ・プロジェクトは何が出てくるかわからない屋台のような役割があるということです。我々は非営利団体ですが、今後は、地域の人と一緒に現代美術のアートセンター的な役割を担っていくのではないかと感じています。

アートを選択できる自由

●彫刻家

森川 亮輔氏



木を専門にする彫刻家。'95年福島県いわき市に移住し、'99年に弟子屈町に移住。弟子屈町・ホテル風曜日、旭岳温泉・湧駒荘、川湯エコミュージアムセンター等で個展開催。

私は大学を卒業してからいろいろな職を経験し、'79年東京神田で初個展を開催してから21年間、ずっと木の彫刻だけを続けてまいりました。私の作品は、木との対話のなかから自然に生まれて、そこから見る人によって変化することが特徴だと考えて、それにふさわしい場を求めて、'95年にいわき市に、そして'99年には弟子屈町に移住をし、制作活動を行っています。

弟子屈町に来たきっかけは、いくつかの市町村に自分の資料を送って、「よかつたら来い」という回答をいただいたからです。音威子府も非常に好意的でアカデミックなところでしたが、すでに移住されていた芸術家が出て、お話を聞いているうちに、そこは荒らしてはいけない聖地のように感じ

たわけです。そこで逆にあまり基盤がない弟子屈の方がいいだろうと思い立って突然やってきました。弟子屈町の役場の方は大変好意的で、空き家探しなどいろいろと気遣ってくれました。役場の方には非常に感謝しています。

豊かな地域の創造という意味では、どの作品が好きか、どのようなスタイルの作品が好きかを選択できる自由があることが大切ではないかと思っています。北海道はとにかく広いのですから、その選択の自由を与えることができるように、パブリックアートというものを、もっと広く考えてもいいのではないかと思います。

地域の記憶・歴史の再現

●宮城教育大学助教授

新田 秀樹氏



宮城県美術館学芸員を経て'92年より現職。大学、企業等の専門家による共同研究体「パブリック・アート研究プロジェクト」代表。

私はこれからのパブリックアートを議論していく上で、いくつかのキーワードを考えてみました。

まず一つは「記憶」あるいは「歴史」です。その地域の人々が刻み込んでいる「歴史」を再現してみせる、あるいは一種のメモリアルとして見せていくことが重要ではないかと思っています。例えば札幌のモエレ沼公園はごみ処理場だったという「地域の記憶」が埋め込まれています。モエレ沼公園は、どこまでが作品かわからない作品ですが、このようなあり方も、これからの社会と芸術の一方向ではないかとも考えています。

もう一つのキーワードは「インフラストラクチャーとしてのアート」

です。以前は、単に都市に彫刻を置くような発想でパブリックアートが始まりましたが、現在はそれを越えて、基盤になる部分に質の高いアートを置くことが必要とされているように思います。今、公共事業は批判の対象ですが、本当に良い公共事業とは何かを考えていかなければならないと思います。

もう一つは「パトロネージ」というキーワードです。芸術活動も公共事業も、スポンサーシップやメセナなしでは成り立たないものです。そこで重要になってくるのが目利きです。イサム・ノグチに対する伊坂会長の目、それにミケランジェロの芸術だってメディチ家やローマ教皇なしでは成り立たなかったでしょう。その目で「発見」される、あるいはそういう機会を与えて、優れたものを生んでいくことが非常に重要だと思います。日本では行政のなかにアートマネジメントを専門にする人が少なく、また人事異動ですぐに担当が変わってしまいます。それでは質は高まりません。展示会の開催も、アーティストが直接交渉や調整をしなければならぬ現状です。アーティストのビジョンが明確に反映されることはいい点ですが、一方でそれを直接吸い上げてくれるシステムがないと、非常に大変です。今、求められていることはそうした課題をどうやってシステム化していくかということではないでしょうか。

公共的な芸術と、社会のかかわりを持ったプロジェクトは、単なる芸術家支援ではなく、長期的には地域振興のための投資だという概念を持っていなければいけません。短期ではなく、長期的に見て、それが一つの都市の魅力づくり、地域の特色づくりになっていくという視点を持って、マネージメントと資金の仕組み

をきちんとつくっていくことが大事ではないかと思えます。

市場原理に振り回されない地域づくり

●釧路公立大学教授・地域経済研究センター長

小磯 修二氏



北海道開発政策に携わり、'97年に「芸術文化による新しい北のまちづくりをめざして」をテーマにした研究会を主宰。'99年より現職、現在は地域政策の分野で実践的な研究活動を行う。

少し前まで国土計画や地域計画で「美しい」という言葉を使うことに気恥ずかしさがありました。しかし'98年の「21世紀の国土のランドデザイン」では、芸術文化についてしっかり1章が設けられるようになりました。地域におけるアートを政策的に展開していくことは、これからという気がします。

19世紀にジョン・ラスキンというイギリスの美術評論家がいって、芸術経済論という研究に取り組んでいました。彼は、芸術家は黄金と同じだと言っています。芸術家は作られるものではなく、発見されるべきものであるという意味です。「レオナルド・ダ・ヴィンチは港湾労働者のなかにもいるのではないか」というのです。地域と芸術のかかわりでは、芸術家に能力を発揮させる機会をつくるのが、地域社会の大切な役割だと思います。

地域経済では市場メカニズムだけで全てが論理づけられるような議論が多いようです。しかし、大量消費地から離れた地域にとっては、市場原理とは別の地方の論理があるべきではないかと考えています。市場性だけではない、その土地にいかねれば体験できない、そういう地方の

魅力がこれからの地域活動を考えていく上で重要になっていくのではないかと考えています。例えばアメニティという言葉でいわれるような地域の魅力を地域の政策として自ら作り上げていくことが大切です。それにはアートの分野が大きな手がかりになるのではないかと考えています。さらにパブリックアートの「パブリック」の意味をしっかりと考えていくことが大切です。パブリックとはいわゆる「公」ですが、日本では「官」の仕事と置き換えているような風潮があります。パブリックとは「私・プライベート」に対するもので、社会の営みに対して私欲を廃したかわりであるはずで、官のみならず、企業も、住民も、NPOも、それぞれ共有していかなければならないものです。パブリックの意識を社会のなかで共有していくことが、生き生きとした地域社会をつくることになると思います。パブリックマインドに支えられてこそ、パブリックアートは地域のなかで輝いてくるのではないのでしょうか。



寄稿

Contribution

アートな景観の魅力

景観・デザイン・まちづくりとアート

有限会社中井仁実建築研究所
取締役環境デザイン室長

中井 和子

●Text:Nakai kazuko

1. アートとデザイン

今は美術館に彫刻を觀賞しに行く時代ではない。限られた屋内空間のなかに恣意的に並べられた彫刻群は、美術史や作家論の勉強にはなるが、鑑賞者にとってもアートにとっても、もはやそれ以上のものになりえないように思える。芸術作品が人間の内面の精神性や深層心理に働きかける癒しの効果は勿論認めるが、それとてアートが美術館の空間内に収まっていなければいけない必然性にはならない。ギリシャやローマやパリなどの長い歴史を有した都市においては、彫刻は都市空間の要となる場所に立地し、公共的建造物と一体となって、都市の骨格的景観形成に重要な役割を演じてきた。元来、彫刻は屋外空間に存在するもので、周辺の自然や建物と対峙するなかで初めてその内部に秘めた磁力を発揮し、公共空間に緊張ある新たな価値を創出し、多くは都市空間の骨格的構造の一端を担って都市のシンボリックアートとして、時代の変遷を経てもなお評価される存在であった。

例えば、パリの都市景観を考えれば理解できる。シャンゼリゼ通りが始まるシャルル・ド・ゴール広場は12の道路が集中するロータリーを形成しているが、この中心核となる広場には19世紀中ごろに建設された凱旋門があり、反対側のコンコルド広場のオペリスクに至る都市の軸線を、誰もが一目で認識できる。また、凱旋門からシャンゼリゼ通りと反対方向への延長線上には、フランス革命200周年を記念したグラン・プロジェ（「すべての人が過去から現在におよぶ作品と知に親しめるようにすることがねらい」ミットラン元大統領）の一環である、新凱旋門（ランド・アルシュ）が1989年に竣工している。さらにその先パリ郊外のセルジ・ポントワーズ市には、パリの都市軸シャンゼリゼ通りの軸線と交わる、環境彫刻家ダニ・カラヴァン氏による新都市軸を有するプロジェクトが存在する。全く空間的・時間的スケールの大きな話であるが、都市デザインもグローバルな観点からみれば、大規模なパブリックアートといえる。このように都市環境におけるアートの役割は、都市スケールの景観構造からのアートの存在が認識され、さらに、公共空間という限られた場に新たな環境哲学を創造する手法としての役割も考えられる。

アートと言うと日本ではとかく、芸術家の哲学や精神性が昇華され凝縮された純粋芸術に傾倒してしまうくらいがあるが、パブリックアートの役割は、純粋芸術とは少し別の次元のものではなかろうか。「パブリック」の言葉の定義が難しいが、「公共」という広い意味に解釈すれば、公共空間とアートの関係は、もっとデザインの領域に踏み込んだ創作活動であると考えられる。「デザイン」という概念は、'19年にグロピウスによりドイツに誕生したバウハウスで創出されたが、その趣意は「…過去における芸術の機能は、堅苦しくいかめしくプライドの高いものであり、それが芸術と私たちの日常生活とを切り離してしまっただが、芸術は、人間が誠実に健康に生きる時には、いつでも存在するものである…」と、あまりに生活からかけ離れてしまった芸術を、我々の日常生活の次元に取り戻そうとする活動であり、それは社会にとって有用な芸術家すなわちデザイナーを育てることであった。イタリアのブルーノ・ムナリーは「私たちが日常的に使用している日用品と私たちが住んでいる環境とが、一つの芸術作品としてふさわしいものと成ったとき、我々はすばらしい生活環境を創出したことになる」と語っているが、まさにこれらの考え方は公共空間とアートの関係に例えることができる。さらに、マキシム・ゴールキーが芸術家について「芸術家は、自分自身の主観的印象を整理して、それらの中に、一般的客観的な意味を見いだす方法と、それらを、納得できる形として表現する方法とを、知っている人間である」と定義しているが、この内容はパブリックアートにかかわるアーティストの立場と役割を的確に物語



ファーレ立川



っていると考える。

2. 景観・環境デザイン・まちづくりとアート

景観、環境デザイン、まちづくりについて、私なりに簡単な定義づけをしておきたい。「景観」とは、人間の視覚で捉えることの出来る眼前の空間の「見え方」で、地域の自然生態系環境と日常生活や生産活動を通じて反映される人文系環境の地域空間への総合的・可視的表現である。眺める主体(人間)が眺める対象(モノ)を、眺める側の価値観において評価するわけで、人間の価値観や属性によって判断基準が大きく左右されると考える。

そして、景観を形成する具体的環境をデザインする行為を「環境デザイン」と呼ぶ。総合的景観形成に向けて地域の環境デザインを行うには、気候・風土や歴史・文化、生活・産業、科学・技術、住民意識・法制度などの「地域景観の文脈の読みとり」を行うことが重要である。実際のデザイン展開では、対象を保全・育成したり、新たに創出・整備したり、あるいは復元することもあり、省エネ化や資源の循環・再生への配慮も環境デザインだと考える。従って、まちの景観を構成する緑や水などの自然系要素、建築物群やストリートファニチャー類の人工系要素、広場や通路など土木系要素を、総合的・計画的に把握した環境のデザインが重要で、アートは最も主体性が強く象徴的要素として位置づけられる。

さらに、「まちづくり」とは、地域にふさわしい快適で魅力ある景観や環境を形成するために、市民・行政・企業が協働して推進していくことが大切で、公共空間とアートの関係づくりが新たな市民意識と景観行政の育成に帰結すれば、一つの成果といえる。魅力あるまちづくりの過程そのものが、市民のまちづくり文化を育むことになる。

3. デザインの公共性と私有性

まちづくりでは、「公共(パブリック)」と「私有(プライベート)」の間の調整が重要である。人や車が往来する街並景観を形成しているのは、公共建築物ばかりではない。私たち個人所有の住宅や店舗も、道路両

側の街並景観の連続性を形成している。さらに、地域の総合的景観として捉えると、港湾や河川、道路や公園、橋梁やダムなどの土木構築物(シビックデザイン)も、地域の骨格的景観を構築する重要な持続的役割を担っている。時間的経緯のなかで周辺景観と融合していくような設計・デザインが望まれる。

公共空間とアートとの関係では、「地」となる背景の街並景観のあり方が、「図」となるアートの存在価値を左右する。派手な街路灯と路面舗装、広告看板の色彩が騒がしい装飾過多の都市景観に、素晴らしいアートを導入しても、その効果は半減しマイナス要因にしかならない。従って、アートを導入する際は、周辺環境の街並景観整備をしっかりと行うことが大切で、公共空間におけるアートと広場と建築物のコラボレーションの内容如何にかかわってくる。

一方、「私有」の立場からのまちづくりや景観形成への関与は、市民のまちづくりや景観に対する「公共的視点」の育成が必要である。はよりの住民参加は市民側も行政側もまだまだ熟度が浅く、中途半端な結果に帰結している場合が多い。パブリックアートについても、都市環境の質を向上させるはずが陳腐な景観づくりに終結してしまったり、アートから発するメッセージが市民に納得されなかつたりすることもあり得る。

先にも述べたが、景観とは見る側の価値基準によって評価される。従って、地域景観には住民の生活文化の質や審美眼のレベル、地域の景観行政のあり方がそのまま反映されてくることになる。行えば良いとする安易な住民参加ではなく、街の歴史的・文化的文脈に照合せながら、我が町の将来像を公共的視点で考えられるものであって欲しい。新たなパブリック空間を創出する理念と哲学を十分に咀嚼し、具現化できる人材が必要である。

4. 都市空間とパブリックアート

パブリックアートとは、都市空間を対象にした言葉であろうか。都市の公共空間にアートを効果的に計画的に組み込むことにより、質の高い都市景観を形成する。あるいは、人々に親しみやすいアート



新宿アイランド

を公共空間に配置することで、無味乾燥な都市空間に潤いを演出し魅力ある都市環境を創出する。前者を代表する事例には西新宿再開発地域にある新宿アイランド・アート計画を、後者の事例には中央線立川駅北口再開発に伴い実施されたファーレ立川を事例として紹介したい。従来、彫刻の屋外展示では、都市空間の地域特性や場所性とは無関係に彫刻を配置したり、その公共空間に不釣り合いなアートが、アート相互間の脈絡もないまま展示されていることも多かった。有名な彫刻家の作品を設置したのだから優れた都市環境づくりができた、都市景観の格も上がると誤認している場合が多い。アートの固有性と公共空間の場所性の融合など、新たな公共の場を創出する意図は皆無である。公共空間にアートを組み込むことは、アートと建築と都市空間の関係に新たな時空間の場づくりを期待している。

例えば「ファーレ立川」の場合、立川基地跡地の第1種市街地再開発事業として住宅・都市整備公団が施工し、'94年10月に竣工した約59,151㎡の施工面積を有する市街地再開発である。オフィス、ホテル、デパートなど新都市を構築する建物群のパブリックスペースに、36カ国から92人のアーティストの参加による109点のアート作品を計画的に配置している。地域住民の活動とアートとのかかわりが、新たな「創造の場」となり未来に向けて発展していくことを願って、イタリア語で「作る、創造する、生み出す」を意味する「ファーレ(FARET)」と命名された。コーディネーターの北川フラム氏は「機能的な新しい都市空間で働

き、訪れる人の五感にささやきかける空間を造りたい。それには美術がかかわ



れないだろうかという思いから出発した」と語っているが、彫刻を都市空間に並べただけの従来のあり方と違い、より積極的なまちづくりへの関与と将来的な展開を感じさせる。アート数量が少々過剰気味で、公共空間のヴォリュームのなかに満載されている感もあるが、芸術作品だけでなく、都市空間の機能的諸要素、例えば換気塔、排気筒、街路灯、ベンチ、車止め、サインなどもアート化されている。全てが一新され無味乾燥な街と化す従来の再開発整備と異なり、北川氏が選定したアートが楽しく配置され、意外な場所にアートを発見するなど、住民に街を散策する喜びやユーモアを提供している。

ファール立川では「ファール倶楽部」と呼ぶ、アート群を案内・解説するボランティアグループが存在し、途中休憩を含めて約3時間に渡り、対象となる再開発市街地を散策しながら案内してくれる。参加者には、アート作品と作者を紹介した「ファール立川アートマップ」が配られる。アートを単に都市空間に設置することから、一歩地域住民側に踏み込んだ試みであると評価できよう。公共空間とアートと地域住民とのコラボレーションと言えるが、ただ、市民のパブリックアートに対する認識度は様々で、進んでボランティア活動を行う人々がいる一方で、ペDESTリアンデッキ下のアートは放置自転車で埋まっている現状があった。ファール立川では、今までの土木・建築主体の再開発事業の公共空間にアートを導入することで、潤いある空間を地域住民に提供できた功績は大きい、アートと公共空間と建築群との総合的インテグレーションにおいては、いま一つ完成度に不満を抱いた。ただ、地域住民の熱心なボランティア活動が、生活文化の側面からパブリックアートの存在を指示しているのがたいへん心強い。

「新宿アイランド・アート計画」の場合は、西新宿再開発地域の一つの拠点地域づくりであり、三角形の敷地に建つ建物群とアートの融合をはかる公共空間の環境デザインである。この計画は、住宅・都市整備公団が西新宿6丁目を進めてきた第1種市街地再開発事業の一部で、新宿アイランドタワーという44階建て超高層オフィス棟を中心に、16階建てオフィス、集合住宅、専門学校、地域冷暖房施設、店舗群、多目的ホール、広場などからなるパブリックスペースである。三角形の敷地特性を活かして3

つの角に3つの円(パティオ広場、多目的ホールの円形棟、アトリウム)を配置し、高層・低層の建物群に都市的規模での空間統合を図っている。新たな公共空間の提案として、水、緑、アート、照明などの環境デザイン諸要素を建築群と総合することで、より質の高いパブリックスペースを構築する試みである。従って、建築群を中心とした公共空間の環境デザインのプロデュースは建築設計者が行い、アートコンサルタントの協力を得て、計画の総合マネジメントを図っている。日本人2人を含む10人の芸術家は厳選され、早い段階からの協働作業によるアート制作により、建築群と一体化したパブリックアートが設置されている。新宿アイランド・アート計画では、単に公共空間とアートの融合にとどまらず、環境デザインを構築している諸要素、例えば、広場やパティオ、パサージュやプロムナード、階段やペーパメントの石、噴水や滝などの水、庭や街路樹の緑、大木や灌木などの自然木、夜景の照明など、さまざまなデザインボキャブラリーをアート作品と融合させ、質の高いアーバンデザインを創出している。この計画では、背景となる建物群のデザインや色彩調整、景観を構築する様々な環境要素のデザインに至るまで、敷地場所の立地条件を読み込んだデザインコンセプトが踏襲され、優れた都市景観が形成されたと思われる。しかし、当初は若い女性に人気があったアメリカの環境彫刻家ロバート・インディアナの『LOVE』の文字や円形のパティオ広場が、現況では心なしか寂しげであり、その後のフォローが気になった。

都市環境のなかで、パブリックスペースはいわば「ハレ」の空間である。まちの顔でありシンボリック的存在として立地している場合が多い。従って、入念な事前の計画と関係者相互の理念・意志の疎通が不可欠であるとともに、アートや環境デザインに対する認識や審美眼の質が重要である。安易なアート選定や公共空間デザインでは、かえってマイナスの都市景観を形成しかねない。また、街の顔となるハレの空間においては、住民参加の手法や意見聴取のあり方も再検討する必要がある。アートと周辺環境との融合を誤れば、アートは公共空間に置かれた陳腐な異物でしかない。都市環境の質を高めるはずの芸術作品が、都市景観や地域環境に大きな損害をもた

らすのであれば意味がない。地域住民に愛されるまちづくりは、優しいようであり、努力と忍耐と時間を要するなかなか難しい試みである。

5. 田園空間におけるアートの存在

かつてアメリカの現代アート作家クリストは、日本の田園空間に多数の大きな傘を持ち込んで配置したり、パリのセヌ川にかかるポンヌフ橋を布で梱包したりして、非日常の空間を創出するイベント行為そのものを、芸術として市民に体感させた。都市の日常的景観を見慣れている市民にとってまちの公共空間が、あるいは農業生産者にとって日々従事している田んぼや畑が、瞬時に芸術的空間となり、非日常の世界を繰り広げる光景に、人々は新鮮な驚きと新たな生活への活力をもらった。

この夏開催された地域振興プロジェクト「越後妻有アートトリエンナーレ2000」は、このような非日常空間を人々に提供するイベントの延長線上に存在している。6市町村が協働で行う広域活性化プランの一つで、その背景には町村合併や存続の問題、地域による歴史・文化や経済格差の問題など、複雑な要因があるように思われる。総合プロデューサーは北川フラム氏で、「ファール立川」のプロデューサーでもある。立川の場合は、都市空間でのパブリックアートの設置であるが、新潟の「越後妻有アートトリエンナーレ2000」では、自然領域での試みである。しかも純粋な自然空間ではなく、人々の手が加わった里山と農地が散在する地域である。住民にとっては農作物の生産空間であり、薪や山菜・キノコを採集する山でもあり、日常生活と密着した生産の場である。当然、都市と農村の住民間の「自然」や「農地」や「里山」に対する認識の違いは大きい。そここのところを、今回の越後妻有アートトリエンナーレではどのように整合性を図ったのであろうか。客観的に見れば、美しい里山の自然と緑の農地は、ロケーションとしては大変素晴らしいものと誰もが感じる。外からの来訪者にとっては、自然とアートの融合に非日常の光景を発見し、あぜ道を歩きながら農地や里山の景観を十分に堪能できると考える。しかし、地元で生活する農業者にとって、毎日の積み重ねによって形成される農地空間は貴重な財産で

「主役と脇役」の違いである。本来は農村景観そのものが「図」として存在し、それは日本の食糧の生産空間であり、人々に安らぎと潤いを与える自然豊かな農地空間で、地域生態系保全の役割も担う多面的機能を有する「主役」の景観のはずである。しかし、新潟妻有アートトリエンナーレでは、「図」となる主役はあくまで「アート」であり、農地はアートを引き立てる脇役が背景としてしか取り扱われていない。美しい農地景観を拝借して、それまでその土地と縁のなかったアートが主人公になってしまった印象を受ける。このような形で多くの人々が都会からやってきても、それは本当の意味で農業や農村を知ったことにはならない。農村景観の美しさの一面は体験できても、それを維持管理している農業者の苦労は理解できないであろう。都市と農村との交流とは一方的な価値観の押し付けであってはならない。両者の無理のない良い関係を形成していく過程が、お互いの立場を理解していくのではなかろうか。アグリツーリズムやエコツーリズム、エコミュージアムなどの形で、都市と農村のよい関係が育ちつつあるなかで、今回の越後妻有アートトリエンナーレの試みは、今後どのように評価されていくだろうか。

マスコミも含めて多くの人々の関心を農村空間に向けさせたこと、約760km²の地域が協働で大きなイベントを開催したこと、現代アートを人々の身近な存在としたことなどは高く評価されて良いと思う。しかしながら、農村空間と都市空間を同質のパブリックスペースとして取り扱うことの問題など、今後へいろいろと検討すべき課題を投げかけてくれた。

6. アートな景観の魅力とアノニマスな景観の魅力

旅先で、なにげない街並景観に遭遇してたいへん感動を受けるときがある。観光旅行のコースでもなく、有名な名所・旧跡でもない極めて日常的な光景であるが、人々の生活が馴染んだ風景であり、使い込んだ生活空間という風情である。このようなまちの景観のアノニマス性（無名性）は、意識して飾られていない分だけ、人々の心の神髄を揺さぶるような感動を与えてくれる。このような都市や農村のアノニマスな景観の存在の魅力は、地域住民が長い歳月をかけて築き上げてきた歴史の蓄積と、住民相互

の人間関係を通して切磋琢磨された生活文化の背景があって、初めて体感できるものである。

一方、公共空間へのアート作品の導入は、アートそのものが作者名を冠した主体性を持ち、何時までも自己主張し続けるわけである。従って、パブリックスペースとアートとの関係は、その公共空間のグローバルな都市計画内での位置づけや役割、敷地の立地環境の読みとり、周辺住民との協議など、公共空間とアートにかかわる人々が、早い段階から意見交換を行い、デザインコンセプトを共有しておくことが必要である。あえて公共空間に主体性あるアートを導入したのであるから、街なかの何気ないアノニマスな景観とは異なる「アートな景観の魅力」が誕生するわけで、アートの存在と周辺環境が創出する新たな景観の影響力はたいへん大きい。アートと公共空間の関係を創造的にコラボレートできる力量が問われてくる。パブリックアートの賞味期限はど

アノニマスな景観



のくらいであるのか、現況ではまだ答えが出ていないが、アートが公共空間にインストールされた時点から、衆目の批評の対象となるわけであるから、地域文化の質そのものがパブリックアートの存在時間を下してくれるのかもしれない。

「景観には、地域住民の生活文化と景観行政の質が反映されます」と、私は繰り返し述べているが、公共空間とアートが創り出す街の「アートな景観の魅力」づくりでも、それは言えると思う。

参考文献

- 『芸術としてのデザイン』ブルーフ・ムナーリ 小山清男訳/ダビット社、1973
- 『SD 別冊』鹿島出版会/1995年7月
- 『造形』



PROFILE プロフィール
(有) 中井仁実建築研究所 取締役環境デザイン室長
中井 和子 (なかい かずこ)

49年東京都生まれ。日本女子大学家政学部住居学科を卒業。フランス政府給費留学生としてパリ国立美術大学、マルセイユ国立建築美術大学留学。その後筑波大学大学院修士課程環境デザイン専攻修了。85年に(有)中井仁実建築研究所環境デザイン室設立。北海道景観アドバイザー、札幌市都市景観アドバイザーを務める。著書に『景観・デザイン・まちづくり再考』(北海道開発協会)、『農業・農村と地域の生態』(共著、農業土木新聞社)など。

Case Study @ bibai-shi.

地域事例-1

まちの記憶を刻む ——アルテピアッツァ美唄

アルテピアッツァとは、イタリア語で芸術広場を意味する言葉。そこには、自然、歴史、アートが融合した美しい空間が存在しています。美唄市出身の彫刻家・安田侃氏の作品が景色と溶け込むように配置された、新たな芸術文化交流施設・アルテピアッツァ美唄をご紹介します。



炭鉱の歴史を残す

美唄市は、かつて炭鉱のまちとして興隆を極め、ピーク時の1956年には9万人を超える人口がありました。市内には、三菱美唄炭鉱、三井美唄炭鉱と二大財閥企業が名を連ね、多くの炭鉱マンがこの地で生活をしていました。三菱炭鉱の炭鉱マンの子供たちが当時通っていたのが栄小学校でした。最盛期には1,200人を超える児童が通っていましたが、石炭から石油へのエネルギー転換により、'63年に三井炭鉱が閉山、そして'72年には三菱炭鉱も閉山したことで、人口流出が続き、とうとう栄小学校も'81年に廃校となりました。美唄市の人口は現在約3万人と、ピーク時の3分の1にも減少しています。栄小学校の体育館は住民のための体育施設となりましたが、ほとんど利用者はなく、また小学校の校舎とつながっていた幼稚園は残っていましたが、園児は少なく、先行きは決して明るいものではありませんでした。

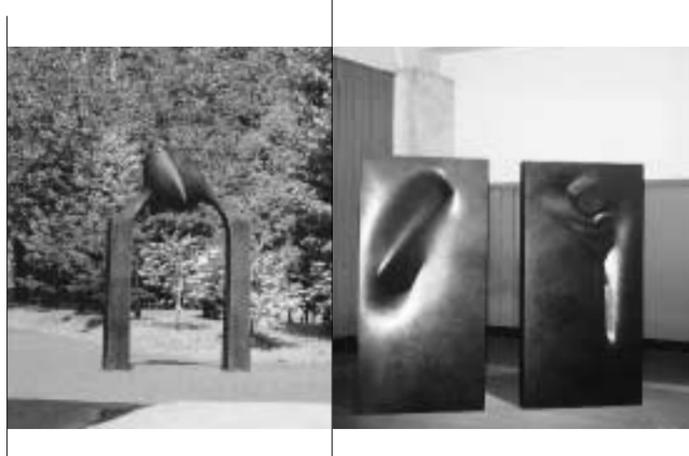
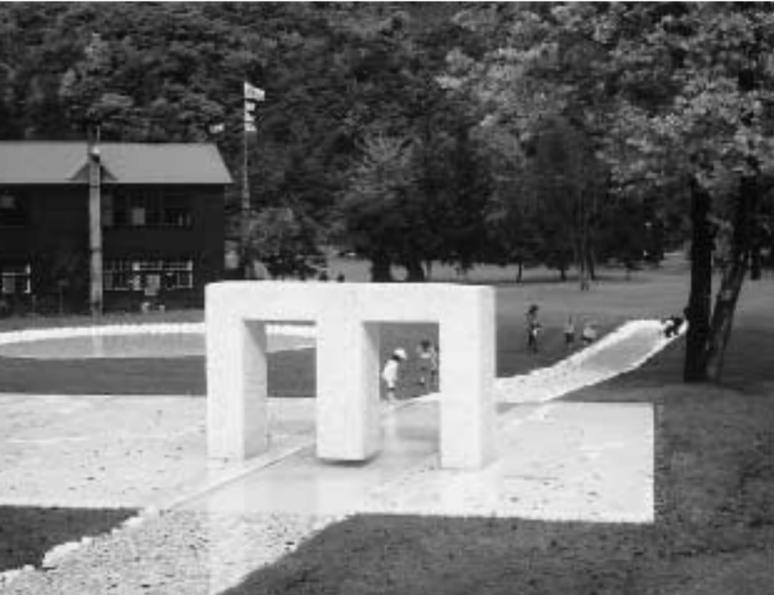
美唄市では、三菱炭鉱の立坑を保存した炭鉱メモリアル森林公園や、三菱美唄記念館など、市内に残る炭鉱の施設などを保存していますが、美唄市出身の安田侃氏は、炭鉱として栄えた地区に「炭山(やま)之碑」という大理石モニュメントを制作していました。そうした経緯もあり、当初は、旧栄小学校の体育館に、安田氏の作品を保管していただけの時期もあったようですが、その後、床、壁、天井など、徐々に改修を行い、体育館や野外空間に安田氏の作品を設置し、'92年にアルテピアッツァ美唄としてオープンしました。現在はスタート当初より敷地も広がり、駐車場なども整備されています。

アルテピアッツァ美唄の奥には、かつて三菱炭鉱で栄えた地区があります。今は廃墟と化していますが、自らアルテピアッツァ美唄に深い思いをもって



Bibai-shi





ARTE PIAZZA BIBAI

かかわっている安田氏は「そこを見てからアルテピアッツァを見てほしい。そうすると、この空間の意味がわかってもらえる」と言います。

炭鉱閉山後、市では公園整備を行うなど、この地区を盛りたてようと努力しましたが、炭鉱で栄えていた時代のように、ことは運びませんでした。しかし、炭鉱の閉山は炭鉱に依存しない新しいまちづくりへの出発点でもあり、また当時の記憶をしっかりと刻んでおくことが、まちとしても一つの財産になると考えたのでしょう。そうした思いからか、体育館や校舎の床や壁などは、できるだけ往時の面影を壊さぬように配慮して改修が行われています。当時の木造の建物としては典型的な手法で作られているのですが、そうしたものをしっかりと残していくことに意義があると考えているからです。

アルテピアッツァならではの 芸術と文化の交流

野外空間には真っ白な大理石で作られた大作『天聖』『天沐』やブロンズの『帰門』などの作品が配置されています。夏には大理石の白と、輝く緑とのコントラストが、秋には紅葉とのコントラストが、そして冬には降り積もった雪が、彫刻にまた違った表情を与え、四季折々に味わいがある風景を作り出しています。また、体育館では、講演会やコンサートなどを開催しており、これまでに詩人・評論家の大岡信氏や谷川俊太郎氏、ジャズピアニストの山下洋輔氏など、超一流のアーティストがアルテピアッツァ美唄を訪れています。300人も入るといっばいの体育館ですが、プレイヤーと観客が一体になれる距離、そしてこの空間に溶け込んだ彫刻が、ここにしかない、唯一の時間を演出してくれます。

アート、芸術などというと、とても遠い存在のよ

うな気もしますが、この空間にくるとなぜかほっとする、また来てみたい、本を持ってきて一日中ここで読書してみたい、そんな気にさせてくる不思議な空間であることが、ここの魅力の一つでもあります。

まちの記憶がアートと一体に

美唄市では、'91年から旧栄小学校体育館の改修を始め、オープン後、少しずつ、広場のなかの整備を進めてきました。広場の造成、駐車場の整備、夏になると子供たちの水遊び場となる『水の広場』の設置、そして現在は、幼稚園の2階に、安田氏の常設展示ルーム、休憩ルームを備えた市民ギャラリーも開設されています。地方財政難の時代でもあり、こうした施設への予算措置が厳しいなか、アルテピアッツァ美唄では入館料無料で市が運営管理しており、今後はこれを維持していくための仕組みをどうつくっていくかが課題といます。しかし、いまやアルテピアッツァ美唄は、まちの人の誇りにもなり、コンサートなどで市外からも多くの人を訪れるようになって、「美唄のイメージが大きく変わった」との声も聞かれています。最近では、わざわざ道外から噂を聞きつけてやってくる人も増えており、道内だけでなく、道外からも注目を集めているようです。また栄幼稚園の園児も市街からわざわざ車で通ってでもと、定員を超えるほどの入園希望があるまでになっています。次代を担う子供にとって、アルテピアッツァの環境がどれほど可能性を秘めているか、計り知れないものがあるように思います。

今まで10年かがりで少しずつ歩を進めてきたアルテピアッツァ美唄。地域の人の地道に取り組む熱意と、安田氏の故郷へのこだわりが、これほどまでに素晴らしい空間を生み出すのでしょう。まちの記憶を刻むことに、アートが大きな役割を果たしています。

地域事例-2

芸術都市の新しい挑戦 | 札幌・モエレ沼公園

札幌市東区にあるモエレ沼公園は、芸術家イサム・ノグチ氏が手がけた最後の作品として、世界的に注目を集めている総合公園です。彫刻家という狭い枠を超え多彩な活動を行った故イサム・ノグチ氏が、その集大成として設計したモエレ沼公園。国の公園事業や治水事業、そして市のごみ埋立事業を効果的に連携させながら、世界的な芸術家の精神を果敢に受け入れた札幌の取り組みについて取材しました。



'88年10月 モエレ沼で設計図を見ながら現地確認と指示をするイサム・ノグチ氏（左から2番目）。右は川村ご夫妻、左は当時の担当者山本氏。



札幌を代表する公園に

モエレ沼公園の造成事業計画は、ゴミ処理場の建設を検討していた清掃事業計画とともに計画されたもので、ゴミ処理場として取得した用地に不燃ゴミや焼却残さを埋め立て、その後でそこを公園にするということでスタートしました。公園予定地には'79年からゴミの埋め立てが開始、'82年から盛土、植栽などの公園基盤造成工事が進められ、'90年まで札幌市で収集された約270万トンのゴミが埋め立てられました。イサム・ノグチ氏が参画するまでに、基盤造成、外周園路、サイクリングロード造成などに着手、モエレ沼をまたぐように内陸部と市街地を結ぶ橋も整備が進んでいました。ゴミが埋め立てられた内陸部を取り囲むように位置するモエレ沼は、豊平川が自然河川として流れていた時代に、洪水や氾濫のためにできた河跡湖と推定されていますが、現在は雁木新川とつながり、国の伏籠川総合治水事業でも一時雨水貯留池にも位置付けられています。公園の敷地面積は、モエレ沼の水面を含む189ha、その中心は内陸部の約100haです。そのなかに、高さ30mの小高い丘のような「プレイマウンテン」、一辺29mのステンレス柱の組み合わせでできた高さ13mの三角錐と芝生で構成された「テトラマウンド」、夏に子供たちの水遊びの場として親しまれている「アクアプラザ」などがあり、これらの部分はすでに開放されています。なかでも花崗岩の階段がピラミッドのように見えるプレイマウンテンは、'33年からイサム・ノグチ氏が長年温めてきた構想が実現したもので、階段の反対側の斜面を登ると、札幌の雄大な景色が眺められる素晴らしいポイント

になっています。このほかにもモエレ沼公園には冬季利用の拠点となるガラスのアトリウム建築物「ガラスのピラミッド」(03年完成予定)、さらに「中央噴水」、「モエレ山」など、'05年の全面完成を目指して造成が進められています。モエレ沼公園は、札幌市の公園のなかでも数少ない水の要素を持つ公園として、また広大な面積を背景に、スケール感ある札幌を代表する公園として成長しているのです。

イサム・ノグチ氏とモエレ沼の出会い

それまでに彫刻だけでなく、舞台美術、商業デザイン、公園の設計など、幅広い活躍をしてきたイサム・ノグチ氏。彼が初めて札幌を訪れたのは、永眠のわずか9ヵ月前、'88年3月でした。イサム・ノグチ氏に事業の参画を求めていた札幌市では、モエレ沼公園のほかに、芸術の森と、現在の札幌市立高等専門学校のキャンパス計画をその事業候補地として考えていました。世界的にも偉大な芸術家へのアプローチでもあったため、当初は多くの作家が作品を設置している芸術の森の野外美術館への出品がもっとも有力との考えもあったようです。しかし、候補地を視察したイサム・ノグチ氏の目に止まったのは、数として付け足したような候補地のモエレ沼公園の計画でした。札幌市環境局緑化推進部造園課環状緑地係の直接担当者としてモエレ沼の視察に同行した当時の山本仁係長（現在は緑の保全課森林保全担当課長）は、「現場はまだごみがどんどん運ばれてきていましたが、すぐにあの空間の魅力を感じ取ったのでしょう。広がりがある、湖もある。街も

近い。視察前にこちらから送付してあった航空写真などを見て、すでに心は決まっていたようでした」と言います。しかし、世界中で公共的な仕事をしてきた経験から行政と芸術的活動をともにする困難さも十分にイサム・ノグチ氏は身にしみていたのです。札幌市の提案は魅力的でしたが、本当に自分が携わることができるのか大きく気持ちが揺れていたようです。そんなイサム・ノグチ氏を支えたのが、アーキテクトファイブ建築事務所の川村純一氏と、指折りの邦楽演奏家でありながらイサム・ノグチ氏の秘書役を務めていた夫人の川村京子氏でした。かねてからイサム・ノグチ氏を尊敬していた川村夫妻は、日本で大きな仕事を実現させてあげたいと、献身的に助力し、尽くしてきた経緯があり、このモエレ沼公園の取り組みについても、全面的に協力する姿勢を貫いてきました。そうした背景もあって、視察のわずか2ヵ月後、モエレ沼公園の設計は、芸術家イサム・ノグチ氏の手によって全体像が描かれ始めたのです。

環状グリーンベルト構想の拠点公園に

当時、札幌市では、市街地を公園や緑地の帯で包み込もうという「夢の環状グリーンベルト構想」が進んでおり、モエレ沼公園もその一つでした。しかし、この構想は「夢の」という言葉通りの存在で、なかなか市民への認知も進まず、思うような事業展開ができずにいた時期でもありました。何か注目を集めて、市民の認知と理解を深めたいと考えていたときに、イサム・ノグチ氏との出会いがあったのです。札幌のような大都市では、大小さまざまな公園が存在します。しかし、総合公園となれば、計画す



Sapporo-shi

る者からしてみれば、少なくとも全市民が年に1、2回は訪れてもらえるような公園にしたいとの思いがあります。森と運河の前田森林公園、花が咲き誇る百合が原公園など、すでに札幌市内にはそれぞれの表情を持つ特徴的な総合公園があります。しかし大都市であればあるほど、多様なニーズに合わせたさまざまなタイプの公園が望まれてきます。また、そのことは今後の公園のあり方を考える上でも重要な課題ともいえます。そういった点では、公園とアートが結び付いたモエレ沼公園は、新しい公園のあり方を提示してくれた先駆けとの評価もできるでしょう。前出の山本氏によれば、「グリーンベルト構想を説明し、札幌市にとってモエレ沼公園が果たす役割をお話しました。イサム・ノグチさんは、モエレ沼公園の社会的意義を理解し、それを意気に感じてくれたのではないのでしょうか。常に自分の仕事の社会的貢献を考えていた方でした」と、回想します。イサム・ノグチ氏は「全体を一つの彫刻とみなした、宇宙の庭になるような公園」を設計しました。それは彫刻の概念を庭園や公園にまで広げ、地球に直接彫り込む彫刻とも考えられ、子供のために公園を造るという、イサム・ノグチ氏の長年の果たせぬ夢でもありました。しかし、公園設計の面から見れば、それは力量が試される場面でもあります。自然の山や森があれば、それを生かしながら残りの空間をどう連携させるかを考えればいいのですが、ゴミ処分場であった土地のため、自然の山や森はまったくなく、おまけに非常に広大な面積です。地形の制約がなく自由な発想ができる分、力がなければまったく無味乾燥な公園が出来上がってしまいます。

時間を惜しむように札幌・モエレ沼公園の設計に当たったイサム・ノグチ氏は、同年の12月30日に

ク財団のジョージ・サダオ氏、日本財団の和泉正敏氏をはじめとするイサム・ノグチ氏に薫陶を受けた大勢の人々に支えられ、その遺志を受け継ぎ'05年の全面完成を目指して着々と造成が進められています。モエレ沼公園は、'98年から部分開放され、多くの市民が公園を訪れ、全面完成を前に、グリーンベルト構想の拠点公園として、すっかり定着しています。

市民の理解を深める布石

モエレ沼公園が一部開放される前に、市民への理解を深める大きな役割を果たしたのが、大通公園に設置された巨大な黒いオブジェ「ブラック・スライド・マントラ」です。この作品は、彼がモエレ沼公園設計を承諾した際、直接本人の口から何か自分の彫刻作品をと提案されたものでした。大通公園の改修計画が始まっていたこともあり、札幌市ではその目玉事業にしようと、'92年に大通西8丁目に仮設置、翌年に大通公園の8丁目と9丁目間の道路を遮断し、公園を連続化して現在の位置に移設されました。当時は、交通渋滞への懸念などから道路を遮断することに対して、なかなか理解を得られなかったことも事実。しかし、当初からイサム・ノグチ氏の参画に熱意を傾けていた桂市長の決意も強く、また芸術に造詣の深い地元テレビ局・札幌テレビ放送の伊坂社長（現会長）との出会いによってイサム・ノグチ氏に関するテレビ番組が放送されるなど、側面からの支援もあり、イサム・ノグチの名は全道に知れ渡るようになりました。今、大通公園は8丁目と9丁目がつながり安心して憩える素晴らしい空間になっ

ています。公園をつなぐことは、車が中心になりすぎた社会に対して、人と車の関係を考えるきっかけを与えるための、彼なりの警告だったのかもしれない。

イサム・ノグチが札幌に残したもの

モエレ沼公園を進めていく上でもっとも難関だったのは、送電線鉄塔の移設と送電線のルート変更でした。すでに送電線の迂回ルートは決まっていたものの、それではだめだとイサム・ノグチ氏本人から強い指示があり、「できないのなら辞める」とまで言い出してしまったそうです。送電線が国の管理する河川を横断することから北海道開発局の積極的な理解を得るとともに民間私有地を買い上げ、何とか難を切り抜けることができました。この結果を意気揚々とイサム・ノグチ氏に報告した札幌市に対して彼は「私のためではないでしょう。あなたがたのため、市民のためでしょう」と言い、その言葉を聞いて目が覚めた思いがしたとの職員もいます。今ではモエレ沼担当になる職員は、イサム・ノグチ氏に関する知識はもちろん、彼を取り巻くさまざまな情報を積極的に学ぶようになり、知識や人間としての幅を広げるようになったそうです。イサム・ノグチ氏の存在は、職員の意識向上にもつながっているのです。

またこの取り組みは職員だけでなく、芸術家にも大きな刺激を与えたようです。札幌市南区にある石山緑地は、国松明日香氏など地元在住の芸術家たちがモエレ沼公園に触発され、札幌軟石採掘場跡を舞台にデザインした空間で、'97年度の日本造園学会賞も受賞しています。行政がやりたいと思っても作家のやる気がなければこうした取り組みはできませ

ん。そういう意味ではイサム・ノグチ氏が札幌に残したものは、目に見えるものよりも、実はエネルギーや心の豊かさや芸術の意味やこれからの公園のあり方など、目には見えないものの方がはるかに大きいような気がします。

モエレ沼公園を最初に視察したときイサム・ノグチ氏は「私が設計すれば、ここは世界的な公園になる。完成すれば世界中から人がやってくる」と大変な自信だったと言います。確かに、イサム・ノグチ氏が目指したのは、単なる公園ではなく、大地を刻むという壮大な計画でした。アート、特に彫刻と公園という結び付きだけを考えると、安全性の問題や市民がどこまで受け入れてくれるかという課題は、常につきまといまいます。しかし、アートと公園という新たな結び付きを実現し、多くの市民がモエレ沼公園を訪れていることから、着実に前進していることは確かです。

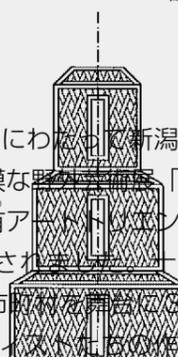
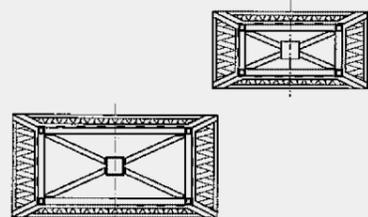
地方財政の厳しさや公共事業の見直しのなか、芸術というもの、あるいは芸術家のこだわりを行政が受け入れていくことは、容易なことではないでしょう。また市民の理解を得ることの不安も、常につきまとうのではないのでしょうか。しかし、芸術が明日の財産として本物の都市を切り開くともいわれます。そうした意味で、モエレ沼公園は、先進的な取り組みとして札幌市が誇る公園です。しかし、重要なのはこれを生活のなかに生きた公園としてどのように取り込んでいくかということでしょう。今後、モエレ沼公園をしっかり支えていけるかどうかは、公園を自分たちのものとして責任を持って守り、育てていく市民の意識がさらに高まっていくことが重要ではないでしょうか。



【レポート1】

アートと地域づくり

大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ2000



昨夏、53日間にわたって新潟県越後妻有地方で大規模な芸術祭「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ2000」が開催されました。十日町市を中心とする6市町村を舞台に32カ国142人のアーティストが作品を設置され、これらの作品を目見ようと、多くの人々がこの地を訪れました。今まで名前すら知られていなかった越後妻有地域は、一躍、日本のみならず、世界からも注目を集め、またマスコミの関心度も非常に高いものでした。

アート、広域連携、地域づくり、過疎対策、都市と農村の交流など、この取り組みには多くの学ぶべき点が見受けられます。大イベントを終えた越後妻有地域と、この取り組みの総合ディレクターを務めた北川フラム氏を訪ねました。

蒸し暑い夏に16万人が越後の農村へ

「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ2000」は、新潟県南部にある十日町市、川西町、津南町、中里村、松代町、松之山町の1市4町1村が協働して進めている地域振興プロジェクト「越後妻有アートネックレス整備事業」の一環として位置付けられたイベントです。6市町村の総面積は約762km²、人口約8万人。夏はむし暑く、冬は日本有数の豪雪地帯という厳しい気候条件とともに、農業政策の転換や絹織物産業の衰退など、基盤産業の環境変化のなかで、産業転換が円滑に進まずに急激な過疎と高齢化の波にさらされ、その状況はすでにいきつくところに来ていたという状況の地域です。

新潟県では、'92年に日本銀行出身の平山征夫知事が誕生し、就任一期目に広域活性化プラン「里創プラン」を提唱、この十日町地域広域市町村圏である越後妻有地域は、'94年にその第一号の地域指定を受けていました。その後、十日町地域では、里創プラン策定協議会を設立し、まちづくりシンポジウムなどを開催、'96年に越後妻有アートネックレス整備構想を樹立し、その活路をアートに見いだすことにしたのです。芸術祭開催までには、地域の魅力を再発見する写真と言葉のコンテスト「越後妻有8万人のステキ発見」や、花を使って広域をつなぐ交流ネットワーク「花の道」、各地域の特性を生かした空間づくりを世界の建築家、アーティストとともに作り出す「ステージづくり」などに取り組み、これらの成果を発表する場として3年に一度開催されるトリエンナーレ形式で芸術祭を開催することとしたのです。第1回となった昨年は、地域と自然、それに包まれている人の生のあり方を見つめ直すという意味で「人間は自然に内包される」をテーマに、7月20日から9月10日まで53日間の会期で開催されました。32カ国、142人のアーティストが参加、約13万人の作品鑑賞者がこの地域を訪れたほか、会期に合わせてセミナーやシンポジウム、コンサートなど大小さまざまなイベントが開催され、イベント参加者は3万人を超え、合計約16万人の人々が越後妻有



磯辺行久
「川はどこにいった」(中里村)

©S.ANZAI



クリスチャン・ホルタンスキー
「リネン」(中里村)

©S.ANZAI



ジャウマ・ブレンサ
「鳥たちの家」(中里村)



ジェームズ・タレル
「米の籠」(川西町)

©S.ANZAI



イリヤ&エミリア・カバコフ
「米の実る里山の5つの彫刻」(松代町)

©S.ANZAI



トーマス・エラー
「人、自然に還る」(松代町)



ホン・スン・ド
「妻有で育つ木」(中里村)



地域を訪れたことになりす。

出展された作品は、6市町村に点在して設置され、美しい棚田を背景に5つの彫刻と5つの文字を配置し、まるで1枚の絵のように見せるイリヤ&エミリア・カバコフ（ロシア）の「米の実る里山の5つの彫刻」（松代町）、宿泊施設でもあり光を感じ取るさまざまな仕掛けがなされたジェームズ・タレル（アメリカ）の「光の館」（川西町）、かつての信濃川の流れて約600本の杭を立てた磯辺行久の「川はどこにいった」（中里村）など、数え上げていたらきりがありません。作品制作過程では、地域住民が参加する仕掛けづくりをしたものも多く、中里村で地域の人々から寄せ集めた衣服を畑の上に吊り下げたクリスチャン・ボルタンスキー（フランス）の「リネン」（中里村）は、その制作過程がテレビで取り上げられました。作品のなかには永久設置のものもあり、それらは会期後も見学することができます。

強力な総合ディレクター・北川フラム氏との出会い

高齢化率が30%に迫るといふ越後妻有地域。しかし、新潟県が推進する里創プラン指定地域であるという県の大きなバックアップとともに、'96年には十日町市には高原リゾート施設がオープン、'97年には越後湯沢とこの地域を結ぶ第3セクターの鉄道・ほくほく線が開通するなど、いくつかの変化の兆しが見られ、この取り組みにもはずみをつけました。そして何よりもこの取り組みの大きな原動力となったのは、総合ディレクターを務めた北川フラム氏との出会いでした。東京・立川市でパブリックアートを取り入れた再開発事業「ファーレ立川」を手がけた実績のある北川氏は新潟県上越市出身。北川氏との出会いによって、すでに地元で検討していた棚田や火焰土器など地域の文化の継承を、アートと結び付けていくことを決定したのです。なかでも現代アートは作品の現場性を大切にすることから、地域と一体となって作品を制作するという特徴があります。この点は、越後妻有特有の自然を背景に作品が出来上がることになり、その場に行かないと作品を

見ることができません。産業誘致や地場産業振興は厳しい状況であったこの地域にとって一つの方向でもあった、交流人口を増やすという点でも、現代アートの現場性は生きてきます。しかし、「現代アートと地域がどう結び付くのか。この地域のなかでどのようなアートが展開されるのか」ということは、正直、誰もわからなかった」（十日町地域広域事務組合事務局企画振興課・押木主査）状況で、それは地域住民も同じでした。このため、地域の理解を得るため、北川氏は準備期間も含めて「5年間で2,000回近い数の住民説明会、自治体の会議に出席」し、総合ディレクターが自ら、住民説得のプロセスに積極的にかかわりました。企画、コーディネート、普及啓発活動、調整まで、幅広くかかわり、一手にその責任を受け止めた北川氏の役割が、非常に大きいことは、誰もが認めるどころです。

「大地の芸術祭」の挑戦

越後妻有アートネットワーク整備事業は、国の地域戦略プラン地区、次世代の地域づくりモデル的实践地区などの指定を受け、また里創プラン指定地域として県とともに実施している広域連携事業です。このため、大地の芸術祭に合わせて、道路改良や河川整備など、インフラ整備が優先的に進みました。いくつかの作品制作は、これらの公共事業を有効に活用、連携しながら進められました。これは、先に述べた「ステージづくり」のなかで、道路改修や施設建設の際にアーティストや建築家がかかわったもので、ハードなモノづくりのなかに、アートの視点を盛り込みながら、できる限りソフトとの連携を図っていくという挑戦です。実際、平成10～12年度におけるアートネットワーク整備事業は、ステキ発見、花の道、大地の芸術祭のソフト事業予算で3億6,240万円ですが、このほかにハード事業としてステージ整備を行い、こちらは10億3,100万円の予算のなかで、公共事業と一体となった作品を取り込むようにして、公共事業とうまくドッキングしながら作品づくりが行われたのです。こうした作品を発表する場が3年に一度のトリエンナーレであり、発表の場を

設けることで、注目度が高まり、地域の公共事業に対しても新しい意味付けをしたように思われます。また、公共事業に対する人々の意識も今までとは変わってくるきっかけになるようにも思えます。

大地の芸術祭のなかでは、もう一つ新しい挑戦といえる組織があります。芸術祭の運営に大きな力を発揮したボランティアグループ「こへび隊」です。こへび隊は、主に首都圏の美術や建築関係の学生を中心に、'99年12月に結成され、その後、口コミで参加者がどんどん増え、最終的には10歳代から70歳代まで約800人が登録しています。作品制作の補助、外国人アーティストの通訳、アテンド、会期中の運営と事務局運営、ホームページ作成や広報活動など、さまざまな局面で主体的にかかわっており、のちに「ボランティアではなく主体的なサポーター」と主張しています。もともとは北川氏が「長期的にやろうとしたら、若い人たちと一緒にやっていくしかない」と発案したもので、当初は地域の人たちに受け入れられてもらえず、苦労もあったようです。しかし、その後の成長ぶりは目を見張るものがあり、事務局スタッフも「あれほど成長するとは」と驚きの様子でした。メンバーの多くが首都圏中心の学生であり、これだけ多くの都市の若者が過疎の農村に関心を持ち、集まってきたという意味は大きいと思います。すでに、こへび隊は3年後に向けて独自の動きを見せており、今後こへび隊が地域を動かす大きな力になっていくようなパワーが感じられます。

広域連携での取り組み

いくつかの市町村が一緒になって事業を進めるといふ広域での取り組みは、とかくそれぞれのまちのエゴが出て、うまく進まないことがよく見受けられます。実際、この越後妻有地域でも、足並みのそろわないことや各市町村での問題は見られたようです。しかし、'97年に3年間継続での事業費が決定されたことで、とにかくやってみようという姿勢を6市町村とも貫き通し、昨年の開催に至っています。また今回のような広域連携での取り組みの成功の要因には、県のバックアップとともに外部協力者の存

在があります。6つの市町村を束ねる上で、総合ディレクター・北川氏の存在は非常に大きなものでした。多くの著名なアーティストたちがこの芸術祭に参画してくれたのも、北川氏の人脈によるところが大きいのですが、それだけでなく北川氏が全体像をしっかりと描きながらも、6市町村の住民説明会をはじめさまざまな会議にできる限り参加し、地域の意向を聞きながら理解を得るといふ地道な取り組みを怠らないうちにせず、大変な労力をかけた結果が広域での取り組みを前進させたといえます。また各市町村間との調整では一種のクッションのような役割もあったように思います。

どんな形であれ、動き出した広域連携での図式は、大きな成果ではないでしょうか。実際、この地域と一緒に里創プランの地域指定を受けた他の5圏域では、まだ具体的に事業は動き出していないと言います。先進性の面でも地域にとって誇りをもてる足跡を残したことは確かです。

3年後に向かって

大地の芸術祭の開催は、交流人口の増加、住民参加と交流の活発化、商業・観光業の活性化、越後妻有地域の知名度アップ、インフラ整備・公共事業の導入、国際化、地域への誇りの醸成など、さまざまな成果をもたらしました。経済波及効果のみならず、新聞、テレビ、雑誌等のパブリシティも相当なものでした。しかし、それと同時に作品展示の分散、運行したシャトルバスの便数や乗り継ぎの不便さ、道路案内の不足、住民の理解と参加の格差、今回の事業規模の検討など、総括報告書には反省点や課題も列記されています。しかし、これだけ注目を集め、なおかつ地域と自然、公共事業のあり方、都市と農村の交流、そして広域連携など、多くのことを考えさせられた取り組みは、かつてなかったように思います。

3年後のアートトリエンナーレが、どんな波紋を投げかけてくれるのか。今後は楽しみな取り組みです。

インタビュー
interview



株式会社アートフロントギャラリー代表取締役

北川 フラム氏

● Kitagawa Fram

——北川さんが越後妻有にかかわったきっかけは？

▶北川：平山知事が就任したときに里創プランという広域圏での取り組みがスタートして、私は新潟県出身ということもあって、委員会のメンバーになりました。当初6圏域で動きが見られて、そのなかの十日町を中心とする越後妻有地域は、もっとも難しい地域だと言われていました。一時は稲作で日本を支えたような地域だったのに、今はひどい過疎に高齢化。社会資本も残っていないし、昔のしがらみが強く残っていたからです。そんなところに私のような人間がかかわることになったのは、一か八かの賭けだったように思います。私はもともと実践主義ですから何かやってみたかったし、最も難しい地域だからこそやってみようという思いもありました。

この取り組みにアートを持ち込んだ意義は三つあります。一つは、'50年代にA.ウォーホールが登場して、大量消費型のイメージの氾濫がありました。このときに美術は力を失い、もうやることはないという風潮になったのです。しかし、その後も隅々この方でマイナーに活動してきたアーティストがいて、地球環境問題や都市問題、グローバルスタンダードなどに対して、ささやかなアーティストの主張をしてきたわけです。越後妻有流に言う「アーティストは発見する」存在なのです。今までアートの分野では、アルゼンチンの美術館でも、東京の美術

館でも、作品はどこへ持っていっても展示可能で、均質な美術空間をつくってきていました。ところが最近ではアーティストが均質の場から固有の場に向かっている傾向があります。これは、金融や通信のグローバル化が進むなかで、その場特有の問題にどう対処していくかというアーティストの答えを意味しているのだと思います。アーティストが場に入ると「場の力を探す」「発見する」ことができるのです。

二つ目に市民概念醸成の効果があります。アーティストは作品を作る前に、いろいろなことをその場で学びます。他人のまちに入るわけですから、住民に理解を得なければなりません。そこでは共同作業もありますし、地域の材料を使うこともあります。そのような他者と他者が重なり合うことに対する訓練は、今まで日本のなかで欠落していたもので、それが市民概念の醸成です。分かりやすくいえば、刺激を受けたことで生まれてくるものがあり、それは非常に重要なことなのです。

三つめは、交流人口が増えることです。現代アートは、その場に行かないと本当の良さが分からないもので、人を呼ぶ力があるのです。

実はこのほかにもう一つ、四つ目の役割があります。アートは、一般的には意味のないもので、分かりにくくて、地域おこしに資するとは思えないわけです。だからこそ、そこで起きてくる反動は、すごいエネルギーになります。正直、この企画を発表した後は、大変な叩かれようでした。議会だって大反対。つまり異常な反対活動がまちを耕すきっかけになるのです。これがアートの持つ非常に大きな力です。実際に、アートという訳の分からないことをなぜやるのかという議論から始まり、地域問題や公共事業のことなど、地元でいろいろな議論が行われました。アートにはそんな作用があるからアートを持ち込んだまちづくりにこだわったのです。

——結果的に、約16万人の来訪客がありましたね。

▶北川：アートやパブリシティの力もありますが、もっとも大きかったのは口コミです。噂が噂を呼んで、ぐんぐん広がりました。あの地域の夏は、暑くて湿度が高い、一番嫌な時期です。それを6市町村に散在した作品を探して、案内もよくないところを回ったわけです。でも、「大変だったけど見終わっ

た後に、嫌な感じはしない」という評価がほとんどです。きっかけはアートでしたが、実はあの圧倒的な自然に魅了されたのでしょう。今まで人間が手をかけた里山の自然というものを目の当たりにしたことがなかったのです。北海道のようなそのままの自然は知っているのですが、棚田のような地形はあまり知らないのです。あのような自然と人間とのかわり方を見て、その素晴らしさに引きつけられたのでしょう。最終的にアーティストは、地域の自然という本物の宝を見せし、それを発見したのだと思います。20世紀の美術は都市から生まれた美術ですが、今、都市は病んでいます。アーティストの活動の場が、都市以外にもあったことは非常に新鮮だったのでしょう。だから外国でも大きな評判を呼んでいるのです。

あれだけ各国のアーティストが参画してくれた大きな要因は、越後妻有の地域問題について、世界のアーティストが問題意識を共有できたということでしょう。私もこの取り組みでいくつかの発見がありました。人間が手をかけた自然や、自然とのかわり方において、農業の持つ意味は非常に重要であるということ。地球環境問題や都市問題などを考えていく上で、もう一度中山間地や田舎と言われているところを見直さなければいけないということ。今後はその地域がどのように生きていくかが大きな問題ですが、農業は非常に重要なキーワードだと感じました。今回は「人間は自然に内包される」というテーマを掲げていますが、将来を考えると、その地域だけでは成立しないことは明らかです。例えば金融資本のグローバル化に対して、経済的にどうつながっていくのか。今後の展望をしっかりとっていないと、本当の意味で地域に責任をもってかかわることにならないと感じています。

この地域には、若者がほとんどいないので、専門家のほかにこへび隊というサポート隊を組織しました。支援者とプロがかかわって地域をつくっていくことが重要だと思ったからです。海をきれいにするには山に木を植えるように、地域が一つの地域だけで成立することは無理です。今後はネットワーク型社会が求められてきます。この取り組みが本当に動き出せると確信したときに、若い人たちにバトンタッチしていけるような仕組みを作ろうと考えました。機能的にやろうとしたら、これはあまりいい仕組みではありませんが、長期的に考えると、若い人

たちと一緒にやっていく以外に道はありません。いろいろな人たちがかかわるようであれば、地域はだめです。世代や立場が違う人が集まって取り組んでいくことは非常に重要です。

——住民説明会や会議にも参画されていますね。

▶北川：私は最終的には、あの地域の200ほどある集落すべてにかかわりたいと思っています。もし自分がその出身であればと考えてみてください。これはとてもこだわっています。公共事業の問題もあります。このような地域では公共事業は最大の産業で、公共事業なしに生きてはいけません。公共事業は麻薬ですが、瞬間的な点滴でもあります。今、公共事業がストップすれば、地域は立ち行かなくなります。ですから麻薬であって点滴でもある公共事業を、可能な範囲でソフトな事業にやわらかく切り替えていく方法がいかにあるかということにも挑戦しているわけです。

やり残したことはたくさんありますが、最初の出発点としてはよい結果になったと思っています。

——最後に北海道にメッセージを。

▶北川：北海道は大好きです。人も好きだし、本物の場の力を持っています。例えば釧路には、海があるし、釧路湿原もある。可能性の高い地域です。原始の自然と都市が同居しているのですから、それを生かすようなことができないかと思います。北海道は、それぞれの市町村に、応援団をつくるのが大切です。外部とのかわり方で元気がつくことがありますから、それはとても重要な気がします。特に北海道の人は外部の人間に対する拒否感がありませんから、この財産を大切に、それをきっかけに北海道の応援団ができるといいと思います。

聞き手

釧路公立大学教授・地域経済研究センター長 小磯 修二 (こいそ しゅうじ)

PROFILE プロフィール

(株)アートフロントギャラリー代表取締役

北川 フラム (きたがわ ふらむ)

新潟県生まれ。(株)アートフロントギャラリー代表取締役。同社は、都市計画・まちづくりのアートプロデュース、ランドスケープ計画における環境デザインを中心に、美術品の販売・コーディネート、芸術文化関連のイベント等の企画運営など、美術全般にかかわる業務を展開。'94年に竣工した東京・立川市の「ファーレ立川」ではアートプランナーを務めており、昨年の大地の芸術祭とともに、その取り組みは、常に美術界や建築界で注目を集めている。

環境問題の意識の高まりのなかで、今まで廃棄されていたものを再利用したり、再資源化する動きがますます活発になっていますが、アートの世界と融合する動きが生まれてきています。札幌と釧路での取り組みをご紹介します。



前田森林公園でのパオ風造形物の制作風景。



赤井川村のホテル前庭にあるオブジェ。

ごみアートからまちづくりへ

'96年に結成されたゴミ造形団は、「ごみと親しむ」をモットーに、造形作家・松本純一氏の提唱で結成されたモノづくり集団です。空き缶、ボルトなどの廃材、針金の洗濯ハンガーなど、今まで捨てられていたものを利用して造形物をつくるという、ごみからアートを制作する活動を行ってきました。それとともに、モノをつくる楽しさを通じて、環境問題の大切さを考える活動を目指して、札幌を中心にいろいろな取り組みを行ってきました。市民参加型のアートイベントへの出展のほか、赤井川村のホテルの前庭を舞台に、鉱山のトロッコなどの廃材を利用したロボット風のオブジェ作成、札幌市前田森林公園での枝打ち材によるドーム型のパオ（モンゴル遊牧民のテント式家屋）に似た造形物の作成など、作品もユニークな顔ぶれです。メンバーはアーティスト志向の若者のほか、環境問題に興味のある人、友達づくりが目的の人、まちづくりに興味のある人などさまざまな人たちが構成されています。

年に1、2回の大きな出展活動が続いていたゴミ造形団ですが、昨年は単にアート作品をつくるということだけではなく、今までの活動とまちづくりが一体となった取り組みにチャレンジしています。江別市野幌を舞台にしたイベント運営です。リサイクル素材の国際デザイン大会「デザイン・リソース・アワード」の受賞作を展示する「記憶のデザイン展」と、ゴミ造形団と野幌商店街、住民などが参加してごみからアート作品を制作し展示した「GOMI達のメッセージ展」です。デザイン・リソース・アワードは、資源を有効活用するための優れたデザイン提案に対して賞を与える国際コンペティションで、その展覧会が日本にくることを知った環境問題に関心



珈琲袋をリメイクしたフラッグ

のあるメンバーが、なんとか北海道で開催できないかと考えたのです。江別市は大都市・札幌に隣接し、市内には工業団地などもあることから、地域でつくったものを地域で再加工し、再利用するという地域循環の視点からも今後への展開が期待できます。さらに、空き缶回収やリングプルを集めて車椅子を贈る運動などに取り組み、環境問題への意識が高い野幌商店街の存在もあったことで「記憶のデザイン展」だけでなく、野幌駅から公民館を結ぶ約400mの通りに面した野幌商店街で「GOMI達のメッセージ展」を開催することになったのです。両イベントとも4月21日～30日までの短期間でしたが、メッセージ展では、商店街や地域の方が一緒に造形団のメンバーと作品を制作するなどの成果もあり、大小合わせて40点の作品が展示されました。例えば街路灯に取りつけられたフラッグは、商店街の珈琲店から譲り受けた珈琲袋をリメイクしたもので、商店街の奥さんが作品づくりに取り組むなど、ゴミ造形団との連携プレーでできあがった自慢の作品です。野幌商店街では、空き店舗を改修しメッセージ展のメイン会場となった「ギャラリーNOPPO」をイベント後も常設し、コミュニケーションスペースとして、まちづくりの拠点に位置付けています。

釧路・エコアートへ波及

ゴミ造形団のこの取り組みは、はるか東の釧路に波及していました。

釧路では、一昨年から24時間かけて釧路のまちづくりを考える「チャレンジくしろ24」というイベントが開催されています。さまざまなイベントを行うなかでまちづくりを考えていこうというねらいで、ユニークなイベントが市内の数カ所で開催されます。この取り組みにかかわっている地元新聞社の記者・佐竹直子さんは、通常のイベントであれば参加者はいつも同じ顔ぶれ。何とか、今までまちづくりにかかわったことのない、地域に眠っている新しい人材を呼び起こすことが出来ないだろうかと、「一人称で参加できる場をつくろう」と、一昨年は若者がお年寄りを変身させるおじいちゃんとおばあちゃんのファッションショーを企画しました。そして昨年、これに代わる新たな企画を模索しているときに、江別市野幌でのリサイクルアートを知ったのです。そして「チャレンジくしろ21」の目玉イベントとして、9月16、17日、釧路駅前のラルズビルで「エコアート」と題した、廃棄物からつくられたアート作品の展示会を開催するに至りました。

このねらいは、あくまでも地域で眠っている人材が主体的に参加できる取り組みであったわけですが、廃棄物をアートに変身させる醍醐味もあり、呼びかけに応じて、作品制作には地元釧路公立大学美術部の学生を中心に社会人など、10～30歳代の約30人が参加しました。今まであまりまちづくりに興味がなかった若い世代の参加があったことや、ごみに対する視点が変わったという参加者も多く、成果は上々でした。

釧路でのこの取り組みには、後日談があります。イベント終了後の作品の行き場です。「作品を処分するのであればエコアートにならない」と佐竹さんは考えていたのです。しかし、イベント終了後は継続して展示できるスペースはなく、廃棄処分になっ

アートとリサイクル



「チャレンジくしろ24」のエコアートの制作風景。



使用不可のCDを使って作られた「北海道」。現在、釧路駅に展示されている。

てしまうところでした。ところが、それを知った駅前商店街がショーウィンドウに設置、その後、釧路消費者協会が展示期間をエコアート作品展示に譲ってくれ、さらにこの経緯を知った釧路駅の駅長がほとんどの作品をJR駅に設置することを提案してくれたのです。作品に対する熱意や思いが地域の人々に認められ、またこうした経緯によって、エコロジーやアート、若者の活動への市民の理解が増幅し、エコアートの取り組みの思わぬ成果が生まれたのです。

まちづくりに生かす視点

廃棄物でつくった作品はその後どうするのか。この点はゴミ造形団でも同じような悩みがありました。作品の多くは引き受け先が見つからず、結局はごみに返していました。また、現在、ゴミ造形団は活動を休止しています。この点についてゴミ造形団の事務局長を務めていた白鳥健志さんは「ゴミ造形団にはいろいろな目的をもった人がいましたが、それぞれが関心のある舞台に活動の場を移し、積極的に造形団活動を行おうとするメンバーがいなくなったからです。また、私自身、作品をごみに返す虚しさを感じるようになったこともあります」と言います。ゴミ造形団でのこうした経緯は、啓蒙的な活動を越えたりサイクルとアートの融合には、作り手側と受け手（市民側）のアートとリサイクルへの深い理解が求められているように思えます。

しかし、白鳥さんはこうした経験を経て、その後も野幌商店街にかかわり、モノづくりの楽しさをまちづくりにつなげようと、独自にさまざまな活動に取り組んでいます。昨年夏には、地域住民を巻き込んで、廃棄物を利用した商店街の看板づくりコンテストを開催しました。白鳥さんは「まちづくりとアートの関係は、

スタートラインの協調性づくりや、コミュニケーションの活性化の手法として適していると考えています。モノづくりの楽しさを通じて、下手でもいいから地域住民が主体的に参加できる、そんな取り組みを進めていくことが真の住民主体のまちづくりにつながると思っています」と、これまでの活動をまちづくりに生かす方向を見いだしています。

アートをまちづくりにどう活用するかは、地域が考え、地域の視点で組み立てていくことが重要のようです。また、リサイクルとアートとまちづくりが結び付くには、まだまだ超えなければならないハードルもあるようです。



昨年夏に野幌商店街で行った看板コンテスト（上）。モザイク状に切った木に布を貼り、色を組み合わせることで首里城を描いた。この沖縄料理店の看板は準グランプリを獲得。

●「マルシェ・marche」とはフランス語で市場のこと、同音の「マルシェ・marche」には歩む、行進する、進歩するという意味もあります。北海道（ノルド・nord＝北）が、多くの人々が集い、交流し、活気あふれる地域へ発展するようにとの願いを込めて名付けられた情報誌が「マルシェノルド」です。地域を考えるきっかけとなるように、毎号、地域経済特有のテーマを取り上げてまいります。

●理解を深めるために……

Books

※パブリックアート・フォーラム

『第6回全国パブリックアート・フォーラム札幌 フォーラムレポート』
第6回全国パブリックアート・フォーラム札幌 実行委員会事務局
（お問い合わせ：（株）セントラルプロモーション ☎011-271-7658）

※芸術文化と地域

『芸術文化による新しい北のまちづくりをめざして』
北の開発・New Seedsを考える研究会／（財）北海道開発協会、1997
『コミュニティアートマネジメント～いかに地域文化を創造するか』
小林進著／中央法規、1998
『地域の方とアートエネルギー』
橋本敏子／学陽書房、1997
『公共政策としての＜アート＞』
地方自治ジャーナル208／公人の友社、1995

※越後妻有アートトリエンナーレ2000

ガイドブック『大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ2000』
越後妻有大地の芸術祭実行委員会 2000

※モエレ沼公園、イサム・ノグチ

『イサム・ノグチ～宿命の越境者』
ドウス昌代／講談社、2000

Home page

※安田保氏 <公式ホームページ>

<http://www.kan-yasuda.co.jp/>

※越後妻有アートトリエンナーレ <公式ホームページ>

http://www.artfront.co.jp/art_necklace/top.htm

※モエレ沼公園、イサム・ノグチ氏 <モエレ沼公園情報（札幌市ホームページ内）>

<http://www.city.sapporo.jp/kankyo/ryokuka/zouen/moere/top.htm>

March.2001

No.005

編集後記

著名な心理学者シモンソンによれば、独創的科学者の創造性は幼年期・少年期に受けた芸術教育の豊かさとその水準に密接に関係するといえます。アートの柔軟な発想に地域の再生への知恵、エネルギーが融合することによって、今までにない地域の創造性が生まれる可能性があるかもしれません。かつての米どころ越後妻有の大地の芸術祭への取り組み、炭坑で栄えたまち美唄のアルテピアッツアの空間づくりは、産業の盛衰に揺れる地域の創造的再生にアートがどこまで関われるか、まちづくりの常識への挑戦でもあるようです。（S.K）

地域に素晴らしい芸術があれば、それは住民の誇りになって、まちづくりに大きなエネルギーになるでしょう。でも取材を終えた今、アートにはもっと計り知れない可能性があるように思えてきました。同時に、アートが地域づくりに生かされるための課題も見えてきたように思います。パブリックアートやアートイベントだけでなく、アートという言葉をもっと幅広く捉え、モノづくりの楽しさやアート作品を守り育てることまで含めて、「地域とアート」を考えていくことが必要ではないでしょうか。（M.S）

●『マルシェノルド』へご意見・ご感想をお寄せください。
〒001-0011 札幌市北区北11条西2丁目セントラル札幌北ビル
（財）北海道開発協会 広報研修部

地域経済レポート

『マルシェノルド』係 まで

●表紙の切り絵作家

三苦 麻由子

東京都出身。武蔵野美術短大卒業後、広告代理店勤務などを経てフリーに。'94年札幌へ。みとまゆこのペンネームで、水彩、ペン、墨絵、切り絵など、さまざまなタッチでジャンルにこだわらず活躍中。本誌の表紙は、毎月テーマのイメージによるオリジナル作品を掲載。

開発こうほう増刊／地域経済レポート
KAIHATSUKOHO Extra Number Regional Economic Report

マルシェノルド 第5号

発行：平成13年2月25日
発行・編集：（財）北海道開発協会
編集協力：釧路公立大学地域経済研究センター
印刷所：（株）須田製版 不許複製
<http://www.hkk.or.jp>

Report. 2



- THEME -

【何】

今までの枠を意識せず、
何かを想像して「らん」。
そこに生まれるイメージは、
きつとあなたの心を
豊かにしてくれるはず……。